

熊本県文化財調査報告第 258 集

神 水 遺 跡 3

熊本県立熊本商業高等学校校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011.3

熊本県教育委員会

神水遺跡 3

熊本県立熊本商業高等学校校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2011.3

熊本県教育委員会



神水遺跡遠景（南から）



神水遺跡遠景（北から）



神水遺跡遠景（東から）



神水遺跡調査区全景（真上から）

序 文

熊本県教育委員会では、平成 20 年度に熊本県立熊本商業高等学校の校舎改築事業に伴い、熊本市神水遺跡の発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、古代の道路跡をはじめ幅広い時代の文物が見つかりました。校舎の建設等で遺跡が相当削平されている状況下でありながら、こうした発見ができたのは幸運と言えます。

本遺跡をはじめとする一帯は、以前から古代の肥後地方における政治的中心地として国府や国分寺、国分尼寺といった当時の重要機関の存在が指摘されてきました。しかし、戦後の急速な宅地化等で当時の様相をうかがい知ることが困難な状況が続いてきました。それでも昭和 50 年代から行政による発掘調査が本格化し、その調査成果から少しずつですが当時の様相が明らかになってきております。今回の調査もこうした調査の積み重ねの一つとなることでしょう。

また、古代のみならず近世から近代についても、その土地利用や大衆文化の一端を垣間見ることができたのは注目すべきことです。

今回の調査成果が、学術的資料としてのみならず、皆様の文化財保護への理解を深めていただくための資料となれば幸いです。

最後になりましたが、調査の円滑な実施に御理解と御協力を賜りました関係機関、地元の方々に対して厚く御礼申し上げます。

平成 23 年 3 月 31 日

熊本県教育長 山本 隆生

例 言

- 1 本書は、熊本県熊本市神水1丁目に所在する神水遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、熊本県立熊本商業高等学校校舎改築事業に伴う事前調査として熊本県教育庁施設課の依頼を受け、平成20年度に熊本県教育委員会（熊本県教育庁文化課）が実施した。
なお、熊本県教育委員会が実施する神水遺跡の発掘調査としては、第11次の調査となる。
- 3 本文の執筆は、中村幸弘が担当した。
- 4 遺構の実測は、中村、桑島幸平が担当した。
- 5 遺物の実測及び製図は、中村の指導の元、江見恵留、稲葉洋一（実測のみ）、松本裕子、府内博子、宮崎典子、古閑満代が担当した。
- 6 遺構等の現場での撮影は、中村、桑島が担当し、遺跡の空中写真撮影は、九州航空株式会社 熊本営業所に委託した。
- 7 遺物の撮影は、中村が担当した。
- 8 神水遺跡出土の金属器類の保存処理については、今田里枝が担当した。
- 9 芥子面を始めとする泥面子については、木葉猿蓑元 永田禮三氏から助言を賜った。
- 10 本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、中村が担当した。
- 11 本書に掲載した資料は、熊本県文化財資料室で保管している。

凡 例

- 1 遺跡の座標については、世界測地系（日本測地系2000）を用いている。方位については、座標軸を基準とした座標北を指している。
- 2 現地での遺構の実測は、原則10分の1又は20分の1（配置図は50分の1又は100分の1）の縮尺で行った。報告書に掲載した遺構の実測図の縮尺は、以下のとおりである。
溝状遺構：150分の1 土坑・小穴・道路跡：40分の1 礫集中部：20分の1
- 3 遺物の実測は原寸で行い、報告書に掲載した実測図及び拓本の縮尺は以下のとおりである。
土器・陶磁器：3分の1 石器：2分の1 金属器：2分の1（古銭：原寸） 瓦：3分の1
土製品：2分の1
- 4 土層の色調については、『新版 標準土色帖』（1967年 農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に従った。

本文目次

口絵	
序文	
例言	
凡例	
目次	
第Ⅰ章 調査の契機と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査の経過	3
第Ⅱ章 周辺の地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 調査の方法	10
第2節 遺跡の概要	10
第3節 1区の調査成果	
1 1号溝状遺構	12
2 2号土坑	12
3 3号土坑	12
4 4号土坑	16
5 1号～3号小穴	16
6 出土遺物	16
第4節 2区の調査成果	
1 2号道路跡	20
2 出土遺物	22
第Ⅳ章 総括	
第1節 遺構	29
第2節 遺物	30
第3節 まとめ	30
観察表	33
抄録	38
図版	
仕様	

挿 図 目 次

第 1 図	神水遺跡周辺地質図	第 12 図	1 区出土遺物実測図 3
第 2 図	神水遺跡周辺遺跡分布図	第 13 図	1 区出土遺物実測図 4
第 3 図	神水遺跡発掘調査履歴図（県調査分）	第 14 図	1 区出土遺物実測図 5
第 4 図	調査区位置図	第 15 図	2 号道路跡実測図
第 5 図	調査区遺構配置図及び基本土層柱状図	第 16 図	2 区出土遺物実測図 1
第 6 図	1 号溝状遺構実測図 1	第 17 図	2 区出土遺物実測図 2
第 7 図	1 号溝状遺構実測図 2	第 18 図	2 区出土遺物実測図 3
第 8 図	2 号・3 号・4 号土坑実測図	第 19 図	2 区出土遺物実測図 4
第 9 図	1 号・2 号・3 号小穴実測図	第 20 図	2 区出土遺物実測図 5
第 10 図	1 区出土遺物実測図 1	第 21 図	2 区出土遺物実測図 6
第 11 図	1 区出土遺物実測図 2	第 22 図	西海道駅路及び阿蘇大路推定線位置図

図 版 目 次

図版 1	1 区全景（北東から）	図版 13	2 号道路跡硬化面（南から）
図版 2	1 区土層断面（西から）	図版 14	2 号道路跡礫集中部（北から）
図版 3	1 号溝状遺構（西から）	図版 15	2 号道路跡礫集中部（礫除去後 北から）
図版 4	1 号溝状遺構埋土断面 1（東から）	図版 16	1 区出土遺物（土器等、石器）
図版 5	1 号溝状遺構埋土断面 2（東から）	図版 17	1 区出土遺物（金属器、瓦）
図版 6	2 号土坑（南から）	図版 18	1 区出土遺物（土製品）
図版 7	3 号土坑及び 4 号土坑（東から）	図版 19	2 区出土遺物（土器等、石器、金属器）
図版 8	1 号小穴（南から）	図版 20	2 区出土遺物（瓦 1）
図版 9	2 号小穴及び 3 号小穴（南から）	図版 21	2 区出土遺物（瓦 2）
図版 10	2 区全景（北から）	図版 22	2 区出土遺物（瓦 3）
図版 11	2 区土層断面（西から）	図版 23	2 区出土遺物（土製品）
図版 12	2 号道路跡（北から）	図版 24	2 区 2 号道路跡出土遺物（土器等、瓦）

表 目 次

表 1	神水遺跡調査経過一覧	表 6	出土石器観察表
表 2	周辺遺跡一覧	表 7	出土金属器観察表
表 3	神水遺跡発掘調査履歴一覧（県調査分）	表 8	出土瓦観察表
表 4	遺構一覧	表 9	出土土製品観察表
表 5	出土土器等観察表		

第 I 章 調査の契機と経過

第 1 節 調査に至る経緯

神水遺跡は、熊本市神水 1 丁目他に所在する。

当該地は、神水遺跡の中央部に位置する熊本県立熊本商業高等学校の敷地内である。昭和 30 年代後半から昭和 40 年にかけて建設された教室棟及び管理棟もすでに築 30 年以上経過していた。建造物の耐震強度への関心が高まる中で教育庁施設課（以下「施設課」とする）より老朽化した校舎の建て替えが計画された（熊本県立熊本商業高等学校校舎改築事業）。教育庁文化課（以下「文化課」とする）による事業照会で挙がってきた本事業について、文化課と施設課で事業内容の確認と本遺跡の取り扱いについて協議した。その結果、既存の校舎等がない部分で確認調査を実施することで合意した。

施設課からの確認調査依頼を受けて文化課が実施した確認調査で、遺跡の存在を確認することができた。それを踏まえて改めて協議を行った結果、次年度（平成 20 年度）に文化課が発掘調査を実施することで合意した。

なお、発掘調査に並行して施工される倉庫や渡り廊下等の工事については、その工事内容から判断してその都度工事立会や確認調査を実施することとした。

以下に発掘調査に至る主な文書等の内容を記しておく。

平成 19 年 7 月 23 日 文化課と施設課で協議。確認調査を実施することで合意。

8 月 8 日 施設課より文化課へ確認調査の依頼（教施第 287 号）。

8 月 31 日 文化課による確認調査実施。埋蔵文化財の存在を確認。

9 月 14 日 文化課より施設課へ確認調査の結果を通知（教文第 1537 号）。

9 月 21 日 確認調査の結果を踏まえて文化課と施設課で協議。次年度に発掘調査を実施することで合意。

平成 20 年 9 月 8 日 施設課より文化課へ文化財保護法（以下「法」）第 94 条第 1 項に基づく発掘通知（熊本市より進達 教施第 338 号）。

9 月 24 日 文化課より施設課へ発掘調査の指示（教文第 1457 号）。

10 月 7 日 施設課より文化課へ発掘調査の依頼（教施第 379 号）。

10 月 10 日 文化課より法第 99 条第 1 項に基づく発掘調査通知（教文第 1639 号）。

第 2 節 調査組織

1 確認調査（平成 19 年度）

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	梶野英二（文化課長）
調査総括	江本 直（課長補佐） 西住欣一郎（主幹兼文化財調査第二係長）
調査担当	廣田静学（参事） 木村元浩（参事）
調査事務	宗村士郎（教育審議員兼課長補佐） 高宮優美（主幹兼総務係長） 塚原健一（参事） 高松克行（主任主事）

2 発掘調査（平成20年度）

調査主体 熊本県教育委員会
調査責任者 米岡正治（文化課長）
調査総括 江本 直（課長補佐）
西住欣一郎（主幹兼文化財調査第二係長）
調査担当 中村幸弘（主任学芸員）
桑島幸平（非常勤職員）
調査事務 宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）
川上勝美（主幹兼総務係長）
山田京子（参事）
高松克行（主任主事）

3 整理作業（平成21・22年度）

整理主体	熊本県教育委員会	
整理責任者	米岡正治（文化課長）	平成21年度
	小田信也（文化課長）	平成22年度
整理総括	木崎康弘（課長補佐）	平成21・22年度
	西住欣一郎（主幹兼文化財調査第二係長）	平成21・22年度
整理担当	中村幸弘（主任学芸員）	平成21・22年度
	加藤早織（非常勤職員）	平成21・22年度
	江見恵留（非常勤職員）	平成21・22年度
整理事務	宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）	平成21・22年度
	辛川雅弘（主幹兼総務係長）	平成21年度
	元嶋 茂（高校教育課総務担当課長補佐）	平成22年度
	山田京子（参事）	平成21・22年度
	高松克行（主任主事）	平成21年度

4 調査指導及び調査協力者

師富国博（熊本市教育委員会文化財課）、岡本真也、木村元浩、坂田和弘、馬場正弘、山下義満（熊本県教育庁文化課）、永田禮三（木葉猿窯元）
熊本県教育庁施設課、土木部営繕室、熊本県立熊本商業高等学校

5 調査・整理作業員（敬称略、五十音順）

発掘調査

石山トトエ 宇都宮守 江藤恵子 亀住悦子 川口哲男 国友洋子 合志具英 佐藤千代恵 須田隆之
関根 登 関根龍子 田添るり子 田中香苗 鐵戸亮子 中山光枝 野田 昇 樋脇逸子 松尾幸子
松下博司 武藤由美 村山和英 森本喜代子 吉岡睦生 吉岡龍子 吉田秋満 吉富正美

室内整理

青木美代子 古閑満代 柴田クミ子 田中さつき 手嶋裕子 富田知子 西坂和美 原田春子
藤田繁子 府内博子 松本直枝 松本裕子 宮崎典子

第3節 調査の経過（表1）

発掘調査は、平成20年10月上旬から平成21年1月末までの4ヶ月余りを費やした。当初計画では、夏から開始する予定であったが、諸般の事情により秋にずれ込む結果となった。

整理作業は、平成21年5月から平成22年8月のうち6ヶ月程度を要した。これは、整理班が複数の報告書作成を担っていたため、本遺跡の作業がしばしば中断したためである。

文化財資料室に持ち帰った出土遺物を水洗い、注記、接合し、その後実測、トレース、写真撮影、図版作成等を行うと同時に出土遺物の保存処理も進めた。

以下に発掘調査の調査経過を列記する。（調査日誌より抜粋）

- 平成20年 10月6日 事務所設置。
- 10月8日 重機による表土剥ぎ開始（1区）及び調査機材の搬入。
- 10月15日 発掘調査開始。
- 10月24日 委託業者による基準点測量。
- 10月28日 機械棟建設予定地のイチョウ撤去後に地下の状況を確認したところ埋蔵文化財が存在していることが判明（施設課と協議の結果、本調査の対象にすることで合意）。
- 委託業者によるメッシュ杭設置（1区）。
- 11月4日 文化課木村参事来跡。
- 11月11日 渡り廊下基礎部工事に先立ち立会。遺構・遺物は確認されず。
- 11月13日 1区北側で検出していた溝状の遺構に「S001」と命名。
- 11月20日 昼休みに熊本商業高校の教師と生徒（3年7組）が遺跡内で記念撮影（卒業アルバム）。
- 11月25日 管理棟基礎撤去工事の立会（1回目）。遺構・遺物は確認されず。
- 11月28日 管理棟基礎撤去工事の立会（2回目）。遺構・遺物は確認されず。
- 12月2日 1区南側で検出した土坑状の遺構に「S002」と命名。
- 12月3日 2区（機械棟建設予定地）表土剥ぎ開始。
- 12月5日 熊商デパート準備のため現場中止。
- 12月10日 1区S001南側で検出したピット状の遺構に「P001」「P002」「P003」と命名。
- 12月11日 1区S001南側で検出した土坑状の遺構に「S003」「S004」と命名。
- 委託業者によるメッシュ杭設置（2区）。
- 12月12日 熊本市文化財課師富氏来跡。土層、遺構等について助言を受ける。
- 12月24日 2区中央で検出した落ち込みを「S001」と命名（のちに欠番）。
- 12月25日 年内の作業終了。
- 平成21年 1月7日 現場再開。
- 1月19日 2区北側で検出した落ち込みを「S002」と命名。
- 1月20日 2区S002内北側に硬化面1条、南側に礫集中部1ヶ所検出。S002は道路と推測。
- 1月28日 委託業者による遺跡空中写真撮影。
- 1月30日 現場撤収。機材等を文化財資料室へ搬出。

第Ⅱ章 周辺の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境（第1図）

神水遺跡が所在する熊本市は、熊本県の中央よりやや北寄りに位置する。東側は阿蘇外輪山、西側は島原湾（有明海）に面し、北側は台地、南側は平野とその様相は多岐に渡る。市を横断するように阿蘇山を源流とする白川が流れており、当該地域の地形、気候に限らず歴史や文化にも大きな影響を及ぼしている。西側に開けた感のある熊本市だが、実際には市北西部に位置する金峰山（標高 665 m）系山麓によって海からの風は大きく遮られている。さらに対岸には島原半島があるため、熊本県最大の面積を誇る熊本平野を有しながら気候的には内陸性気候の特徴を示している。

神水遺跡は、阿蘇外輪山山麓から熊本平野に向かって西になだらかに傾斜する肥後台地の一つ、託麻原台地の南端に位置している。台地の北方には白川、南方には加勢川が走り、さらに台地縁辺部に点在する湧水地の一つ、江津湖に面している。このように水利に恵まれているものの未固結堆積物より形成されている土壌は、表層に黒色のローム質の火山灰土、下層には砂礫層や阿蘇火山噴出物が堆積し保水力が弱い。そのため台地上では畑地が、縁辺部では水田が多く営まれている。明治初期に編纂された『今村村誌』及び『神水村誌』には、地勢についてそろって「四方平坦」「運輸便利」「薪炭乏」と記してあり、こうした地理的環境を的確に表現していると言える。

文献

新熊本市史編纂委員会編『新熊本市史 通史編 第一巻 自然 原始・古代』1998年

熊本県環境生活部編『熊本県環境基本計画 環境特性図（地図集） 熊本・菊池（西部）』1994年



第1図 神水遺跡周辺地質図 (S=1/50,000)

第2節 歴史的環境（第2図・表2）

神水遺跡は、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。台地の南端に位置する本遺跡を取り巻く歴史的環境について概略を述べていく。

旧石器時代については、当時の様相を窺い知ることのできる遺跡は確認されていない。新南部遺跡群、健軍神社周辺遺跡群等で石器が数点出土しているのみである。

縄文時代になると徐々に遺跡数が増えていく。縄文時代中期までは断片的な資料が散在しているだけだが、縄文時代後期から晩期にかけて遺跡数が台地上で増加している。北久根山遺跡、新南部遺跡A地点（現新南部遺跡群）、乾原遺跡（現乾原・迎八反田遺跡）、渡鹿貝塚（現渡鹿遺跡群）、鳥井原遺跡、健軍上ノ原遺跡（現健軍神社周辺遺跡群）といった著名な遺跡が並ぶ。

弥生時代になると台地上から次第に低地にも遺跡が多く出現するようになる。稲作の普及と海退による低地の陸化が関係していると言われている。黒髪町遺跡（現黒髪町遺跡群）は弥生土器の標識遺跡として有名である。

古墳時代の代名詞ともいべき高塚のある古墳は確認されていないが、江津湖周辺では水源地遺跡、広木遺跡（現江津湖遺跡群）で方形周溝墓が検出されている。他に陳内石棺（現江津湖遺跡群）も本来は、方形周溝墓の可能性が高い遺跡と言われている。

古代に入ると出水国府跡、国分寺跡、陳山廃寺（国分尼寺）等が出現する。大江遺跡群では駅路（西海道）跡も検出されており、当時の政治的中心地として栄えたと推測される。

中世には国衛の移転等であつての隆盛は影を潜める。健軍陳内城跡（現江津湖遺跡群）は阿蘇氏家臣の光永氏の居城と言われている。また、南北朝時代の合戦として有名な託麻原合戦（1378年）の記念碑は水前寺陸上競技場内にある。

近世になると本遺跡周辺は、主に本庄手永今村及び田迎手永神水村に属していた。寛永13年（1636年）に回遊式庭園である水前寺成趣園が造られ、江津湖畔の風景と相まって風光明媚な景観を形成していた。

近代以降は、幾度かの町村合併を経て昭和初期までには熊本市となる。大正2年（1913年）に蚕糸試験場九州支場、昭和13年（1938年）に水前寺野球場が建設されるが、それでも戦前までは昔ながらの田園地帯が広がっていた。しかし、戦後の熊本市域の拡張や熊本県庁の移転、国道57号線（通称東バイパス）の開通等によって、ここ数十年で急速に宅地化、都市化が進んでいる。こうした動きは、九州新幹線の全線開通（平成23年）や熊本市の政令市移行（平成24年）を契機にさらに加速することが予想される。

最後に神水遺跡の調査履歴についても少し触れておく。本遺跡では、大正5年（1916年）に出水往還のアルコール会社前で甕棺1基が発見されたのが最も古い発見例である（大正5年1月11日付け九州日日新聞に掲載）。昭和に入ってから工事等による不時発見が相次ぎ、そのたびに文化財関係者による出土品の採集や記録保存が行われてきた。そしてこうした状況は、行政による発掘調査が本格化する昭和50年代まで続いた。

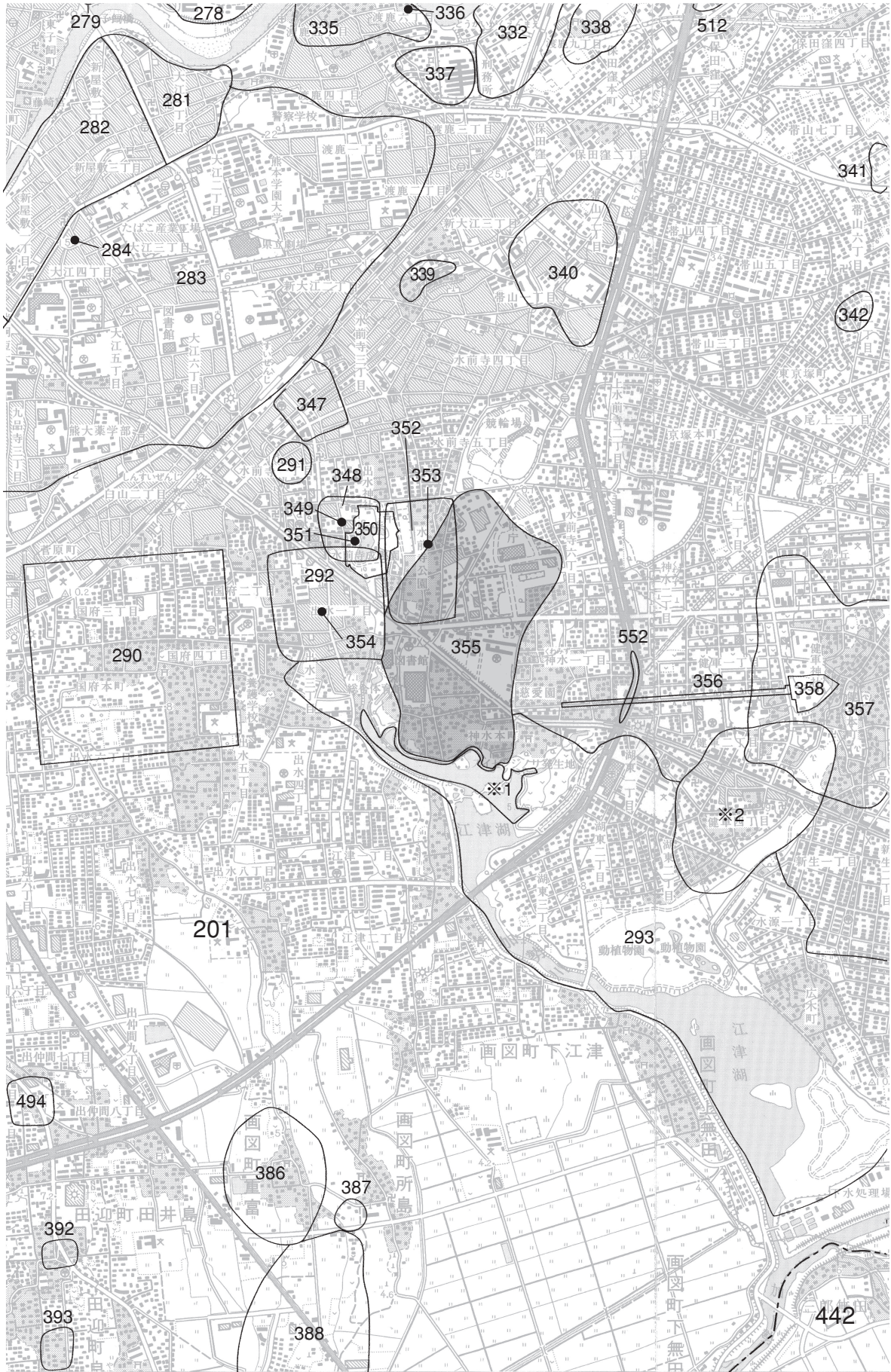
それ以降に実施された発掘調査は、平成21年度の時点で本格的な発掘調査だけでも熊本県教育委員会と熊本市教育委員会合わせて50件を超える。紙面の都合上、熊本県教育委員会調査分の発掘調査履歴についてのみまとめてみた。（第3図・表3）

文献

熊本市教育委員会『昭和46年度 熊本市東部地区文化財調査報告書』1973年

新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 史料編 第一巻 考古資料』1996年

新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第二巻 中世』1998年



第2図 神水遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

表2 周辺遺跡一覧

熊本県(43) 熊本市(201)

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
278	黒髪町遺跡群	黒髪町坪井	縄文～中世	包蔵地		
279	子飼遺跡	子飼町	縄文	包蔵地		
281	大江白川遺跡	大江1丁目	縄文・弥生	包蔵地		
282	新屋敷遺跡	新屋敷町	弥生～中世	包蔵地		
283	大江遺跡群	大江3丁目	縄文～近代	包蔵地		
284	大江義塾跡(徳富旧邸)	大江4丁目	近代	建造物	県・市	
290	出水国府跡	九品寺 国府 国府本町	弥生～中世	包蔵地		
291	西水前寺町遺跡	水前寺1丁目	縄文～中世	包蔵地		
292	国分寺跡	出水1丁目	縄文～中世	包蔵地		
293	江津湖遺跡群	神水町 画図町他	縄文～中世	包蔵地		
332	新南部遺跡群	新南部町	旧石器～古代	包蔵地		
334	乾原・迎八反田遺跡	長嶺町乾原・迎八反田	縄文～古代	包蔵地		
335	渡鹿遺跡群	渡鹿5丁目	縄文・弥生	包蔵地		
336	渡鹿菅原神社境内	渡鹿6丁目	近世	寺社	市	
337	辻遺跡	渡鹿7丁目	縄文～古代	包蔵地		
338	新南部西原遺跡	新南部町	縄文～古代	包蔵地		
339	南平上遺跡	新大江3丁目	古代	包蔵地		
340	帯山遺跡群	帯山1丁目	縄文～古代	包蔵地		
341	保田窪東一本松遺跡	保田窪本町	縄文～古代	包蔵地		
342	三郎塚遺跡	健軍町	縄文～古代	包蔵地		
347	北水前寺町遺跡	水前寺3丁目	古代	包蔵地		
348	水前寺廃寺	水前寺公園	古代	包蔵地		
349	水前寺廃寺跡	水前寺公園	古代	寺社	市	
350	水前寺成趣園	水前寺公園	近世	庭園	国	
351	古今伝授の間	水前寺公園	近世	建造物	県	
352	陳山廃寺	水前寺公園	古代	寺社		
353	洋学校教師館	水前寺公園	近代	建造物	県	
354	肥後出水国分寺塔心礎並礎石	出水1丁目	古代	寺社	市	
355	神水遺跡	神水 出水	縄文～中世	包蔵地		
356	健軍神社杉馬場	健軍2丁目 神水1丁目	近世	参道	市	
357	健軍神社周辺遺跡群	健軍2丁目	旧石器～中世	包蔵地		
358	健軍神社境内	健軍本町	中世	寺社	市	
386	重富遺跡	画図町	古墳・古代	包蔵地		
387	所島大工免遺跡	画図町	弥生～古代	包蔵地		
388	山王遺跡	画図町	弥生～中世	包蔵地		
392	下乙地頭遺跡	田迎町	中世	包蔵地		
393	四才町陳屋敷遺跡	田迎町	中世	包蔵地		
394	良町二石遺跡	田迎町	弥生・古墳	包蔵地		
494	田迎下乙遺跡	田迎町田井の鼻	古代・中世	包蔵地		
512	西原遺跡	新南部	縄文	包蔵地		
552	健軍京塚下遺跡	神水1丁目	縄文・古墳・古代	包蔵地		
※1	スイゼンジノリ発生地				国	
※2	健軍遺跡群	新生1丁目 健軍4丁目		包蔵地		

新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第四巻 近世Ⅱ』2003年

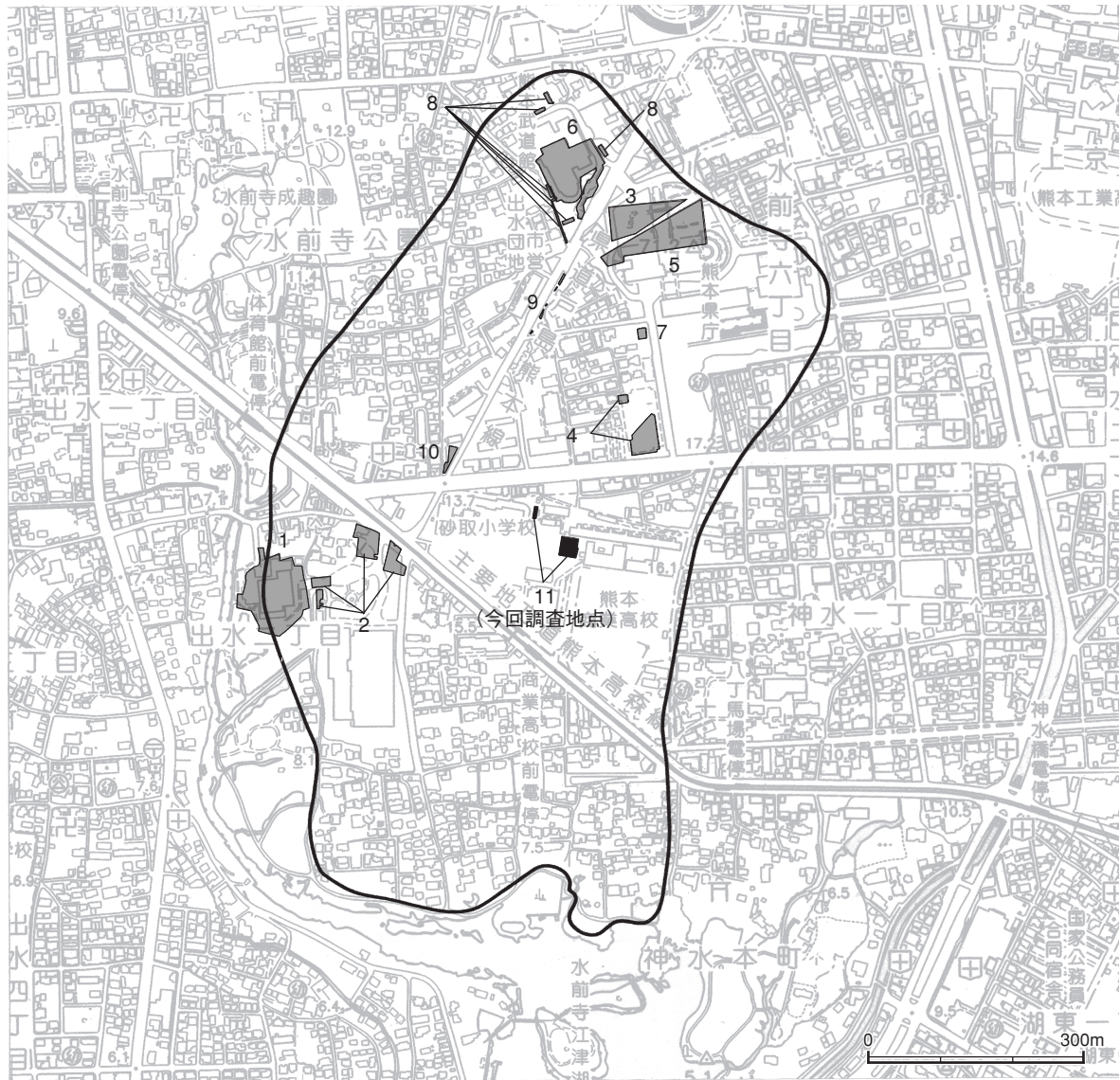
新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第七巻 近代Ⅲ』2003年

新熊本市史編纂委員会『熊本市都市計画事業産業調査資料(大正・昭和初期)』熊本市史関係資料集第5集 2001年

熊本県教育委員会『神水遺跡』熊本県文化財調査報告第69集 1983年

熊本県教育委員会『神水遺跡Ⅱ』熊本県文化財調査報告第82集 1986年

熊本県教育委員会『陳山遺跡』熊本県文化財調査報告第155集 1996年



第3図 神水遺跡発掘調査履歴図（県調査分）

表3 神水遺跡発掘調査履歴一覧（県調査分）

平成22年4月1日現在

No.	遺跡名（調査名）		所在地	調査原因	調査年度
	旧	新			
1	神水遺跡	神水遺跡第1次（県）	出水2丁目153	県立図書館建設	1983
2	神水遺跡	神水遺跡第2次（県）	出水2丁目 地内	江津湖公園整備	1984
3	蚕業試験場遺跡	神水遺跡第3次（県）	水前寺6丁目237 外	新県庁舎建設	1993
4	神水遺跡	神水遺跡第4次（県）	水前寺6丁目132 外	立体駐車場建設	1994
5	蚕業試験場遺跡	神水遺跡第5次（県）	水前寺6丁目49 外	新県庁舎建設	1994
6	陣山遺跡	神水遺跡第6次（県）	水前寺公園28-51	勤労者総合福祉センター建設	1994
7	神水遺跡	神水遺跡第7次（県）	水前寺6丁目18-1	新県庁舎建設	1996
8	陣山遺跡	神水遺跡第8次（県）	水前寺公園28-51	勤労者総合福祉センター建設	1996
9	神水遺跡 05	神水遺跡第9次（県）	水前寺6丁目67 外	戸島熊本線緊急地方道路整備	2005
10	神水遺跡	神水遺跡第10次（県）	水前寺公園581 外	戸島熊本線緊急地方道路整備	2007
11	神水遺跡	神水遺跡第11次（県）	神水1丁目 地内	熊本商業高等学校校舎改築	2008

※新遺跡名については、調査当時の熊本県遺跡地図を基に調査したのものについても現在の遺跡地図に基づいて「神水遺跡」としてカウントし、調査次数をその後に付している。

なお、混乱を避けるため熊本県教育委員会実施分については、新遺跡名（調査名）の末に（県）としている。

第三章 調査の成果

第1節 調査の方法

当初は、管理・普通教室棟建設予定地の一部（旧ロータリー部分）のみ調査予定であったので、調査区を設定する際には特に調査区名を付していなかった。ところが、その後の工事立会等で新たに機械棟建設予定地（旧駐輪場部分）を発掘調査することとなった。そのため調査区は、旧ロータリー部分を1区、旧駐輪場部分を2区とした。ちなみに本文中に出てくる「旧校舎」とは、今回解体された管理棟等が建設される以前に存在していた旧県立第二師範学校校舎のことである。

調査区内のグリッド割付に際しては、世界測地系に準拠した座標軸を基に5mメッシュのグリッド（東西方向にアラビア数字、南北方向にアルファベット）を設定した。本来なら一連の校舎改築事業に対応できるような包括的なグリッド設定をする必要があったが、前述のような事情により各調査区で完結するような設定にしてしまった。

重機による客土（1区、2区ともⅡ層まで）掘削後、人力による遺物包含層の掘削に移行し遺構の検出作業を行った。1区については、削平が著しく、重機による客土掘削後ただちに遺構検出を行う形となった。

遺構は、各調査区で検出後に遺構と判断したものから「S○○○（○はアラビア数字）」と遺構番号を付していった。また、ピット（小穴）については、別途「P○○○（○はアラビア数字）」として番号を付し、調査中に複数のピットが1つの遺構を形成すると判断した段階で改めて遺構番号を付すつもりであったが、今回の調査ではそこまで至らなかった。なお、本書で報告する際にはSやPではなく、遺構の種類を記している。（例 S001 → 1号溝状遺構）

遺物は、遺構に伴うと判断したものは遺構毎に取り上げ、それ以外はグリッド毎にまとめて取り上げた。また原位置を保っていると判断したものは、出土状況を記録した後で個別に取り上げた。

第2節 遺跡の概要

以下、調査区毎に概要を述べる。（第4、5図・図版1、2、10、11）

1区は、解体された管理棟前のロータリー部分に当たる。面積は704.6㎡。既に遺物包含層は、ほとんど消滅していた。さらに昭和30年代後半の校舎建替工事やロータリー中央に植えられていた樹木により広範囲にわたり攪乱されていた。遺構は、溝状遺構1、土坑3、小穴3を確認した。すべて同じ層（Ⅲ層上面）で検出したが、削平著しく本来の検出面は不明である。

遺物は、溝状遺構出土の遺物が多くを占める。網コンテナ（外寸 622×462×196mm）3.5箱分のうち3箱分が溝出土である。その内容は、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、瓦、石器、土製品、金属器等とさまざまである。溝状遺構からは多くの遺物を出土したが、大半は小破片で流れ込んだものであり、明確に時期比定できるものはない。なお、土坑、小穴からは、遺物は出土しなかった。

2区は、西側に隣接する砂取小学校の横にある北側駐輪場の一部に当たる。面積は82.8㎡。旧校舎や現校舎の埋設物により攪乱されているが、1区で消滅していた遺物包含層は比較的良好に残っていた。遺構は、Ⅵ層上面で道路跡1を確認した。道路に付随すると考えられるものとして硬化面1と礫集中部1も検出した。

遺物は、遺物包含層及び遺構内から出土した。網コンテナ2.5箱分のうち1箱分が遺構出土である。内容的には1区と大差ない。包含層が残っていたため各層の出土遺物には一定の時期差が認められるが、1区同様破片資料が大半である。

なお、掲載した遺構及び出土遺物については、巻末に一覧表としてまとめている。（表4～9）



第4図 調査区位置図

第3節 1区の調査成果

1 1号溝状遺構

遺構（第6、7図・図版3～5）

調査区北端に位置する。Ⅲ層上面で検出したが、上層の削平が激しいため本来の深さを保っていたわけではないようだ。検出状況から東西方向に走る溝状の遺構と判断した。旧校舎の基礎を始め多くの攪乱で破壊されているが、本調査区の遺構の中では残りは良好な方である。検出した範囲での規模は、長さ25m、幅4.9m、深さ1.4～2.0mを測るが、その大半は調査区外に延びているため本来の規模は不明である。

本遺構は東西方向に走っているが、西に進むほど深くなっている。地形的には西側に向かって緩やかに傾斜しているので、地形に沿うように掘られたと考えられる。内部には幾つかの段差がついている。段差は1～数段であるが、西側に進むほどその段は増える傾向がある。基底には、所々に安山岩質の礫が見られるが、これはⅤ層中に含まれているもので、本遺構のために敷設されたものとは考えにくい。

埋土の断面状況を2箇所まで精査したところ、断面A-A'の6層、9層（断面B-B'の9層、12層）及び断面B-B'の4層、14層において所々に硬化した部分を確認した。ただし実際に埋土を掘削しても面をなして検出することはできず、散漫な硬化であったと推測される。埋土内において少し硬化した部分を確認されていることから、長期間ではないにせよ通路として使用されていた可能性もある。

遺物

出土遺物についての個別の紹介は、「6 出土遺物」に譲る。ここでは取上方法や出土状況等について概略を述べたい。

遺物の取り上げについては、地点によって埋土の堆積の消長が激しいうえ、土質が似通っており、層毎での掘削が困難であったため、遺構内の段差を目安に大きく上層、中層、下層と分類して取り上げた。

出土した遺物は、前述のとおり今回の調査で出土した量の半分以上を占めるが、漫然とした出土状況で、原位置を留めるものは確認できなかった。小型品を除けば小破片での出土のみに留まり、全容を押し量れるほど復元できる資料も皆無に等しい。ただしその内容を見てみると、弥生時代から近代に至るまで幅広い時期に及ぶうえ、その種類は土器や陶磁器から瓦、釘、古銭、さらには土製品と多岐にわたる。

2 2号土坑

遺構（第8図・図版6）

調査区南東端に位置する。Ⅲ層上面で検出したが、1号溝状遺構と同様、本来の検出面かどうかは定かではない。旧校舎の基礎によって半分程削平されている。平面形は、楕円形を呈する。長さ180cm、残存幅70cm、残存深さ27cmを測る。

埋土は1層のみである。Ⅲ層とあまり違いはないが粘性の違いで検出した。

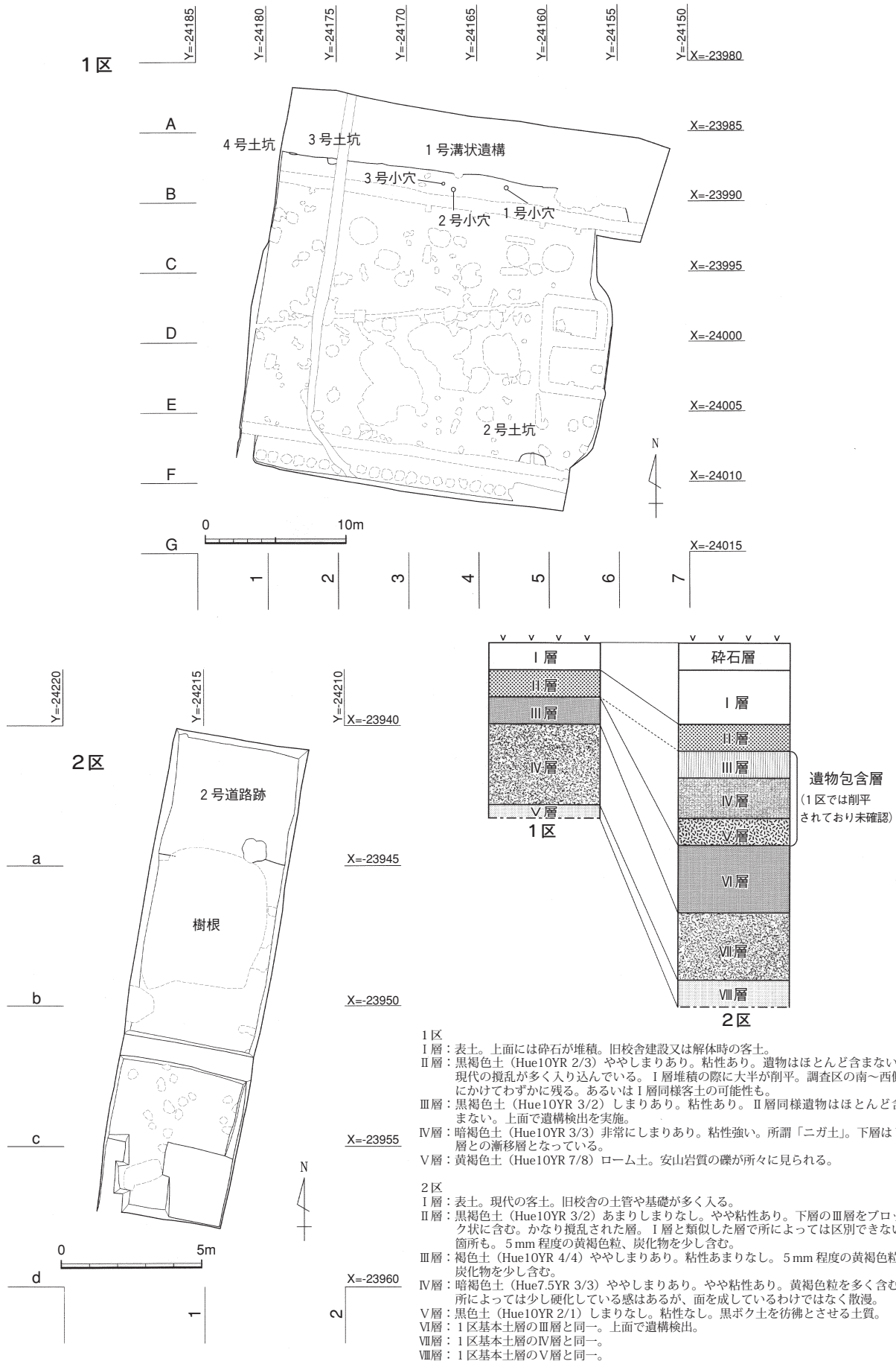
遺物

出土遺物は、確認されていない。

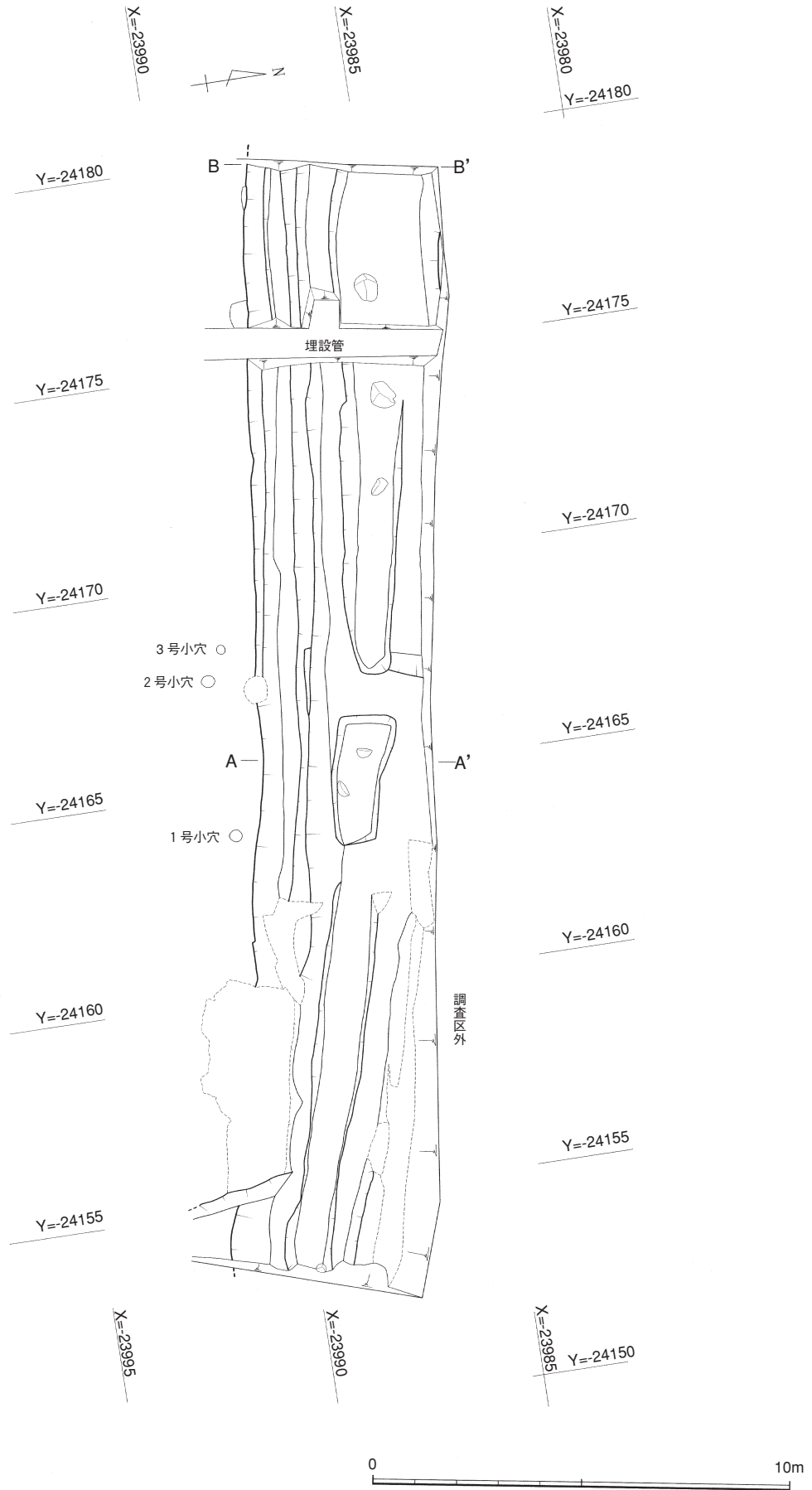
3 3号土坑

遺構（第8図・図版7）

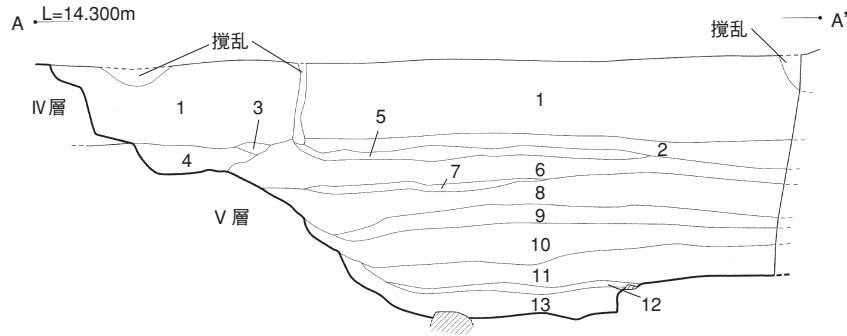
調査区北西部、1号溝状遺構の南側に位置する。埋設管及び1号溝状遺構に切られている。Ⅲ層上面で検出したがすでにⅡ層は削平されており、遺構検出面自体も少なからず削平されていると考えられる。1号溝



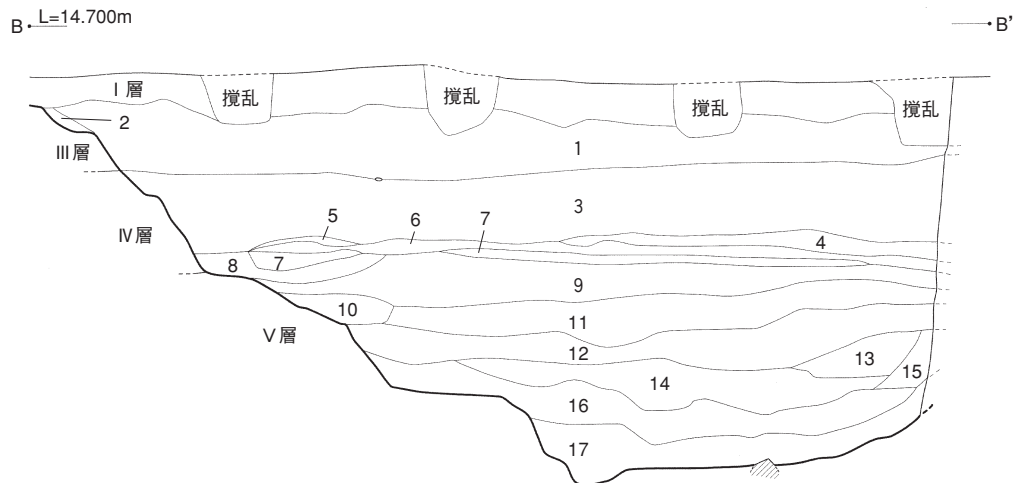
第5図 調査区遺構配置図及び基本土層柱状図



第6図 1号溝状遺構実測図1



- 1層：褐色土 (Hue10YR 4/4) あまりしまりなし。やや粘性あり。5mm 程度の黄褐色粒、炭化物、小石を含む。上からの攪乱が多く、かなり混じっている印象を受ける。
- 2層：暗褐色土 (Hue10YR 3/3) あまりしまりなし。やや粘性あり。1～2cm 程のロームブロックを多く含む。
- 3層：黒色土 (Hue10YR 2/1) しまりなし。やや粘性あり。1cm 大のニガ土をブロック状に含む。
- 4層：褐色土 (Hue10YR 4/6) あまりしまりなし。あまり粘性なし。1～5mm 程の黄褐色粒を少し含む。1層よりきめが細かい。
- 5層：暗褐色土 (Hue10YR 3/3) 2層に比べややしまりが無い以外は同質。
- 6層：黒褐色土 (Hue10YR 3/2) ややしまりあり。やや粘性あり。1～5mm 程の黄褐色粒、炭化物を含む。上面の所々に硬化したような箇所があるが明確ではない。
- 7層：黒褐色土 (Hue10YR 3/1) しまりなし。粘性あり。水成堆積したような土。
- 8層：暗褐色土 (Hue10YR 3/3) 土質は2層に類似。南側の肩付近は地山 (V層 ローム土) が崩れているため特に黄褐色が強い。
- 9層：暗褐色土 (Hue10YR 3/4) しまりあり。やや粘性あり。1～5mm 程の黄褐色粒を含む。6層のような硬化した面がある。6層より硬質な印象。こちらも範囲はあまりはっきりしない。
- 10層：黒褐色土 (Hue10YR 2/3) あまりしまりなし。やや粘性あり。2区のⅢ層に類似した土がブロック状に混じっている。
- 11層：黒褐色土 (Hue10YR 2/3) 10層と土質が似ているが2区のⅢ層の混入はなく、ややしまりが無い。
- 12層：黒色土 (Hue10YR 2/1) しまりなし。粘性あり。7層に類似しており、水成堆積か。
- 13層：黒褐色土 (Hue10YR 2/2) あまりしまりなし。粘性あり。地山 (V層 ローム土) に近いせいか黄褐色粒をやや多く含む。所々に礫 (V層中に見られる安山岩質) も見られる。



- 1層：にぶい黄褐色土 (Hue10YR 4/3) ややしまりあり。あまり粘性なし。5mm 程度の黄褐色粒、炭化物 (5～10mm)、小石を多く含む。
- 2層：黒褐色土 (Hue10YR 2/3) ややしまりあり。粘性あり。5mm 程の黄褐色粒を少し含む。土質的にはⅡ層に近い。
- 3層：A-A'の埋土1層と同じ。
- 4層：暗褐色土 (Hue10YR 3/3) しまりあり。あまり粘性なし。1～5mm 程の黄褐色粒、10mm 程の炭化物を含む。上面は所々硬化。
- 5層：黒褐色土 (Hue10YR 2/2) あまりしまりなし。やや粘性あり。
- 6層：暗褐色土 (Hue10YR 3/4) あまりしまりなし。あまり粘性なし。ニガ土ブロックを少し含んでいる。
- 7層：暗褐色土 (Hue10YR 3/3) 土質は4層に類似。ただし硬化はなし。
- 8層：A-A'の埋土4層と基本的に同じ。北側にはニガ土、ロームブロックが混入している (7層の下くらい)。
- 9層：A-A'の埋土6層と同じ。
- 10層：黒褐色土 (Hue10YR 3/2) あまりしまりなし。あまり粘性なし。ニガ土、ロームブロックを多く含む。
- 11層：A-A'の埋土8層と同じ。ただしロームは含まない。
- 12層：A-A'の埋土9層と同じ。
- 13層：12層と土質は類似。ただし硬化したところはなく、ややしまりが無い。
- 14層：暗褐色土 (Hue10YR 3/4) しまりあり。やや粘性あり。ニガ土、ロームブロックを含む。所々硬化した部分あり。
- 15層：13層と土質は類似。13層より粘性がある。
- 16層：A-A'の埋土11層と同じ。
- 17層：A-A'の埋土13層と同じ。



第7図 1号溝状遺構実測図2

状遺構の検出作業中に検出したが、残存していたのは基底部の一部のみで大半は削平されていた。平面形、規模等は定かではないが、残存長 45cm、残存幅 65cm、残存深さ 8cm を測る。

埋土は、1層のみである。

遺物

出土遺物は、確認されていない。

4 4号土坑

遺構（第8図・図版7）

調査区北西部、1号溝状遺構の南側で3号土坑の西側に位置する。検出状況は3号土坑と類似しているが、残存状況はさらに悪い。基底部の一部のみかろうじて残存していた。平面形、規模等は定かではないが、残存長 14cm、残存幅 60cm、残存深さ 5cm を測る。その残存状況から、本来遺構であったかも疑わしいが、地山とは明らかに異なる埋土を検出したので遺構として報告しておく。

埋土は、3号土坑と同様1層のみで、土質も類似している。

3号土坑同様、性格、時代の不明な土坑である。

遺物

出土遺物は、確認されていない。

5 1号～3号小穴（第9図・図版8、9）

本調査区では、土坑以外にも多くの小穴（ピット）を検出したが、大半が樹根によるもので攪乱として処理した。そうした中で不明な点もあるが、いくつかの小穴については記録を取ったのでまとめて紹介したい。

1号小穴は、調査区北側、1号溝状遺構の南側に位置する。一応Ⅲ層中での検出であるが、上面は削平されているのは間違いない。径 31 × 30cm、残存深さ 12cm を測る。埋土を確認したが、柱痕らしきものは見えなかった。

2号小穴は、調査区北側、1号溝状遺構の南側に位置する。検出状況は、1号小穴と同様である。径 33 × 29cm、残存深さ 8cm を測る。やはり削平されているせいかかなり浅い印象を受ける。柱痕は、確認できなかった。

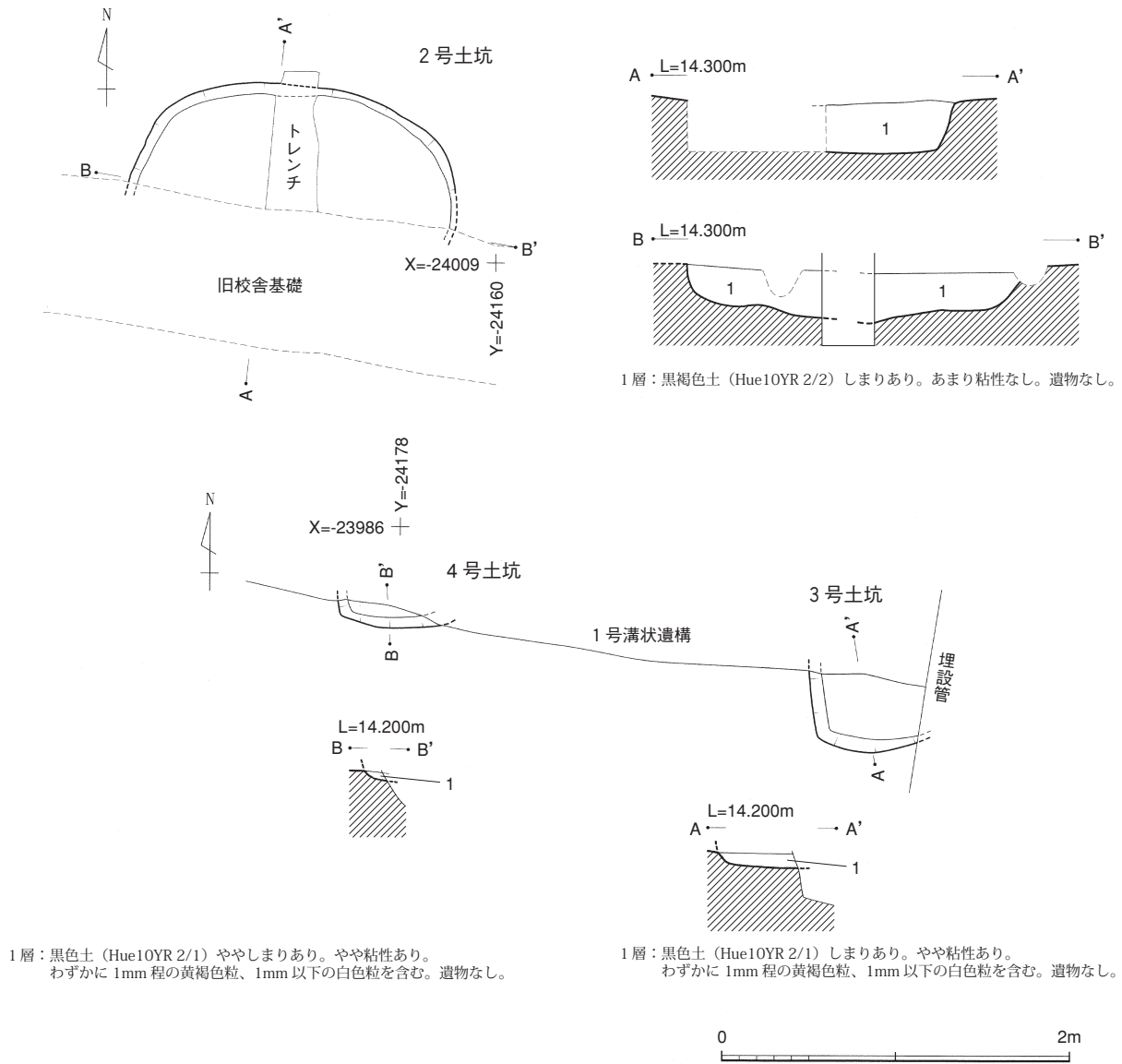
3号小穴は、前述した2号小穴の西側に隣接している。検出状況も他の小穴と同様である。現状で径 22 × 20cm、残存深さ 10cm を測る。やや小振りとも言えるが、本来は他の小穴と大差なかったと推測される。柱痕は、確認できなかった。

残念ながら今回検出した小穴をもって何らかの遺構の存在を想定するには至らなかった。攪乱として処理したもののなかにこれらに関連するものがあつた可能性もあるが、掘削して内部を精査した結果では、遺構とは言い難いものが大半を占めていた。したがって本調査区では、計3基の小穴のみ報告しておく。

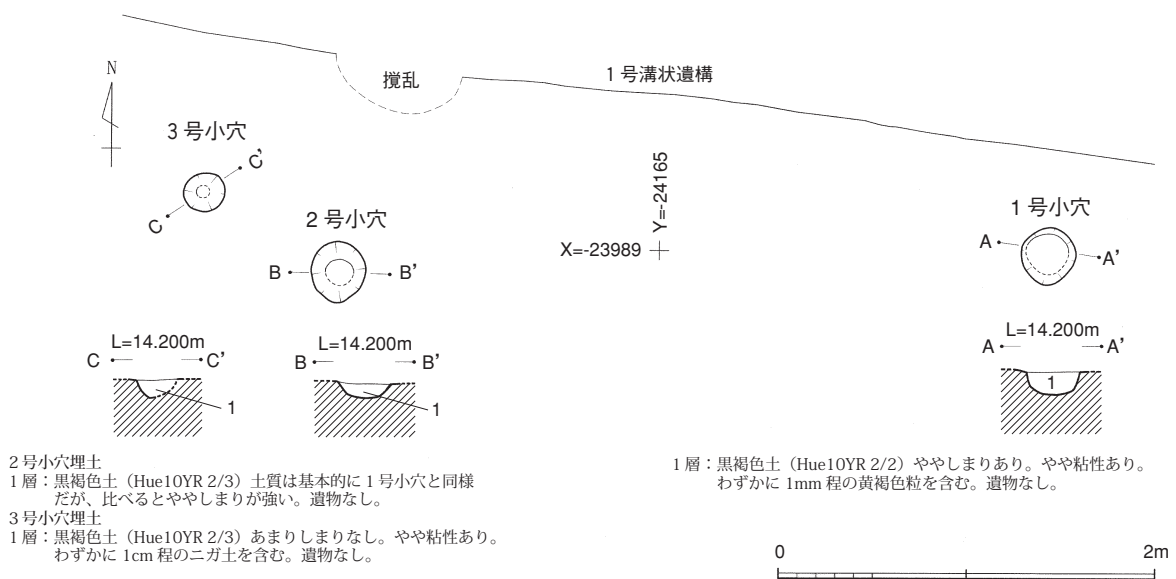
なお、いずれの小穴からも、出土遺物は確認されていない。

6 出土遺物

1区の出土遺物は、その大半が小片である。しかも網コンテナ 3.5箱分という数量は、調査面積 704.6㎡からすると決して多いとは言えない。図化できるものは限られているが、1号溝状遺構の出土遺物を中心に一括して報告していく。



第8図 2号・3号・4号土坑実測図



第9図 1号・2号・3号小穴実測図

土器・陶磁器類（第10図・図版16）

今回の調査で最も多くの数量を数えるが、完形品は皆無である。むしろ小片が大半を占め、器種、部位、時期の特定が困難なものも少なくない。以下、器種別に報告する。

1・2は、弥生土器である。1は、壺口縁の一部で外面に暗文状のミガキを施す。2は、甕脚台で1/2程の破片である。脚は上げ底気味である。

3は、黒色土器の口縁である。内外面を黒く仕上げた両黒土器である。ミガキは、内面のみ認められる。

4・5は、墨書土器である。どちらも文字は一部のみしか確認できず、字体は不明である。4は坏か椀の胴部、5は椀の胴部で、高台～底部が残る。

6・7・15は、土師器である。いずれも椀の高台～底部で、6は赤彩されている。15は遺構外出土で、高台の接合痕が明瞭に残っている。

8・9は、須恵器である。椀の高台～底部で、底部周縁に高台が貼り付けてある。

10～13は、瓦質土器である。10は、軟質の瓦質土器で焜炉、11・12は鉢、13は香炉と考えられる。12については、内面に播目らしきものが見られるので播鉢か。いずれも破片資料で、全体の形状は判然としない。

14は、陶器である。1/4程残存する椀で、陶磁器類の中で全体の形状が分かる唯一の資料である。

石器類（第11図・図版16）

土器・陶磁器類に比べて小数である。計7点図示した。

16は、打製石斧である。破片資料だが、刃部の一部が認められる。砂岩製で表面に自然面が残る。

17は、スクレイパーと思しき石器である。加工途中の未成品かもしれないが、横長剥片を加工したスクレイパーとしておく。

18は、石錘である。安山岩の礫を使用しており、表面には明瞭な紐の擦痕が残っている。

19・20は、砥石である。それぞれ石質が異なり、19は流紋岩質の石（天草陶石？）、20は砂岩である。

21は、円盤状の小石で基石として利用したものと考えられる。結晶質石灰岩で白色を呈し、器面には研磨痕が認められる。

22は、石硯である。粘板岩製でかなり破損しているが、携帯用の硯である。墨堂がやや窪んでいる。

金属器類（第12図・図版17）

石器類よりさらに点数は少ない。計12点図示した。

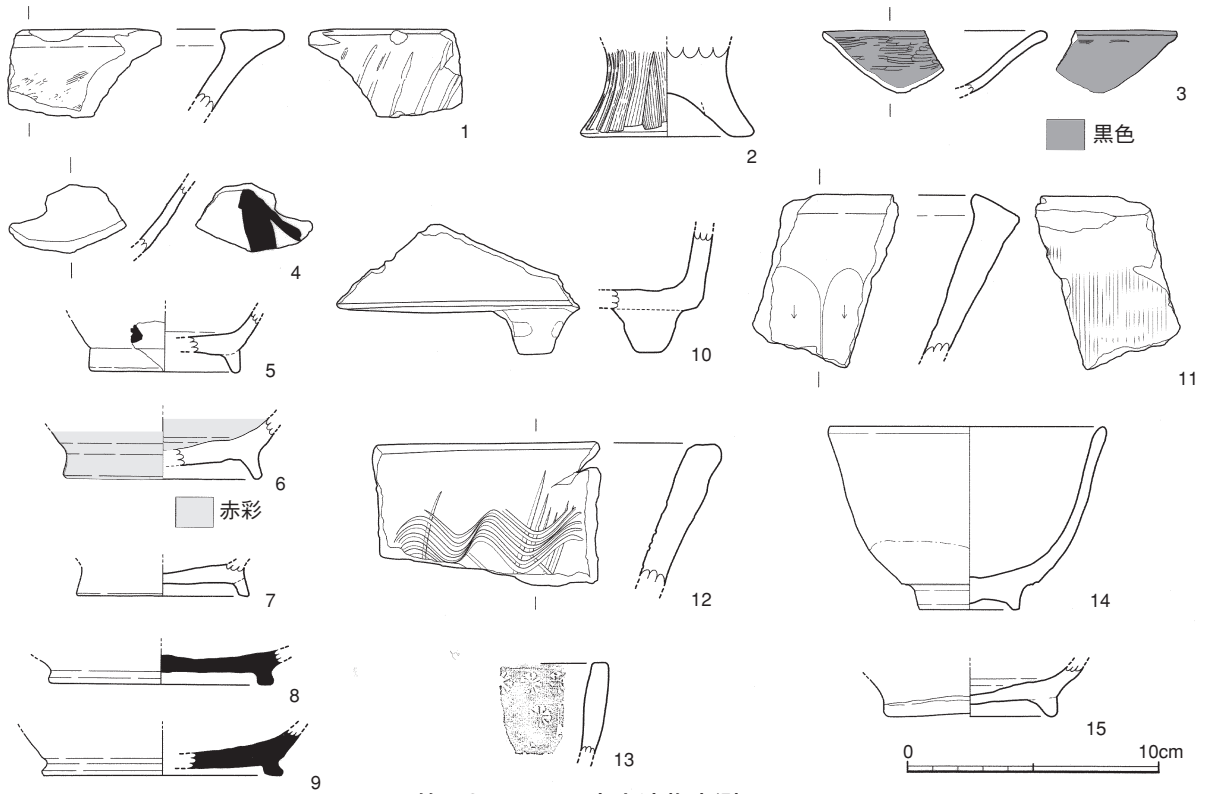
23～30は、鉄釘である。欠損しているものがほとんどである。いずれも軸の断面が方形を呈する和釘である。頭部が欠損しているものもあるが、形状からいずれも頭巻釘ではないかと推測される。ただし30のような小片は鉄鏃の茎部の可能性も否定できない。

31～33は、煙管である。31は、雁首で、32・33は、吸口である。いずれも真鍮製とみられ、32・33は、直接接合しないものの、出土地点や大きさから同一個体の可能性もある。

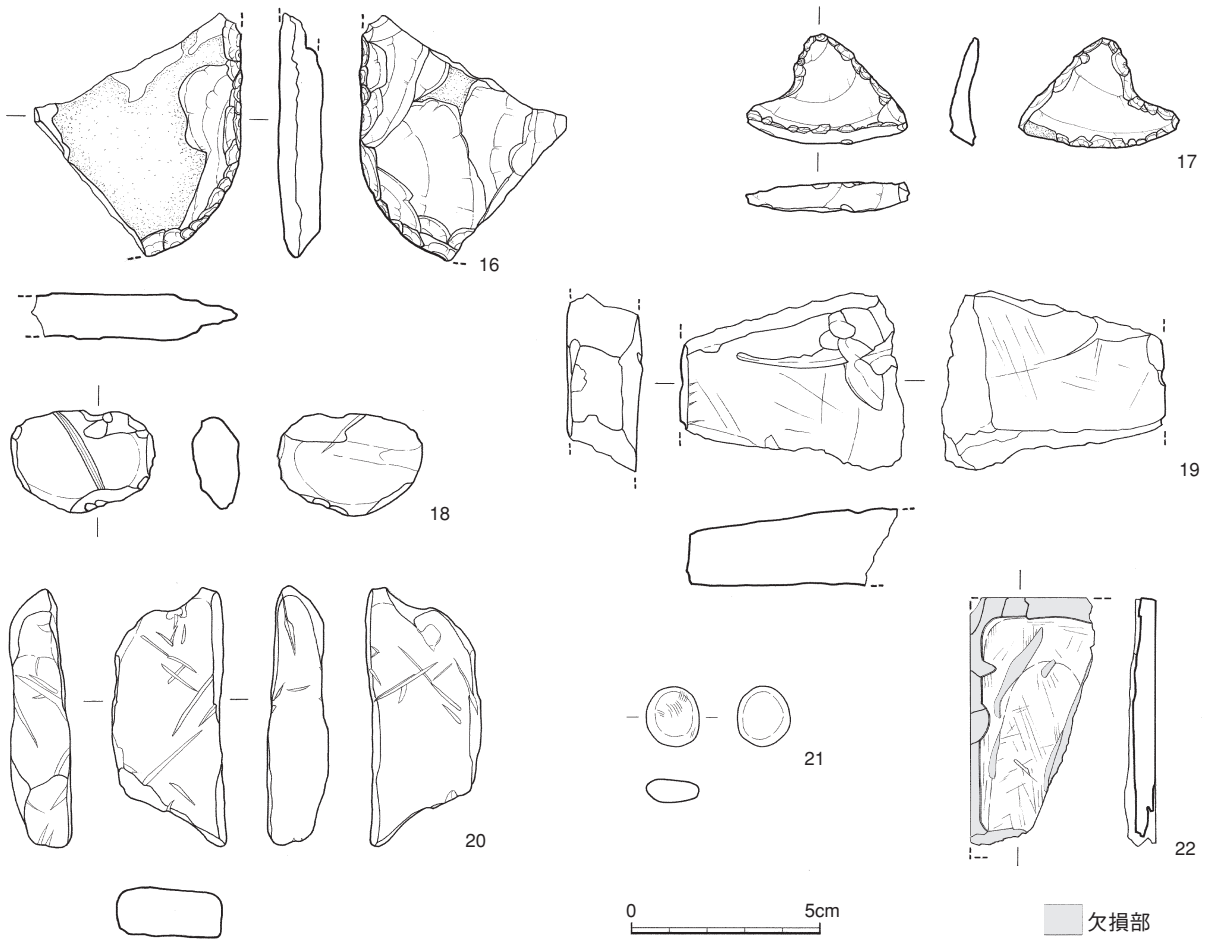
34は、器種不明の金属器で円盤状を呈する。凹レンズ状に窪み、端部に柄を思わせる欠損部があるため、匙状の器具なのかもしれない。

35は、古銭で寛永通宝である。古銭で図示できるのはこの1点のみである。

なお、鉄銭と思しきものが他にも1点出土しているが、錆がひどく図示していない。



第10図 1区出土遺物実測図1



第11図 1区出土遺物実測図2

瓦類（第13図・図版17）

3点のみ図示した。全体の形状は押し量れない小片のみである。

36は、丸瓦、37・38は、平瓦である。36は、玉縁の1/2程度が残存している。凹面には布の綴り合わせと思しき痕跡が確認できる。37・38は、側面の一部で凸面には37は縄目叩き、38には格子目叩きが残る。

土製品類（第14図・図版18）

多く図示したが、全体の形状が比較的是っきり分かるものが多いためである。

39～42は、土錘である。端部を欠損しているものもあるが、概して残りはよい。42は、やや大型である。

43～49は、陶磁器片の端部を加工した、又は加工したと思しきものである。本来の名称は、定かではないが本書では「陶磁器片転用品」としておく。2～5cm程度の大きさで、不整形ながら円形を意識したような作りである。

50～54・63は、土製人形や土人形と称されるものである。製法は、型合わせが多い。ただし、50・54は後述する芥子面の可能性もある。50は、烏帽子を被った猿で、烏帽子部は黒く着色している。下部以下を欠損している。51は、半分程欠損しているが猫である。52は、裱人形であろうが、顔が欠損しているのかどうかは不明である。頭部内面には径6mm程度の穿孔が見られる。53は、頭部のみだが柔和な面立ちから女性と思われる。下端には52と類似した穿孔がある。54は、後ろ半分が欠損していると考えられる人像で、着物を着て荷物を背負う旅人のように見える。63は、亀甲文があるので亀の甲羅の一部であろう。内面には指頭圧痕が残っている。外面には白土がわずかに残る。

55は、箱庭道具である。烏居を模したもので細部まで表現されている。器面は、赤く着色されている。型合わせで作られ、側面には粘土を掻き取った痕もある。下端には穿孔も残っている。他の土人形や芥子面に比べて胎土や焼成が洗練された感がある。

56～60は、芥子面である。人獣の類が多いが、56は蠟燭を模したものである。57は力士で、58・60は翁、そして59は狐である。裏面は基本的に平らなものが多いが、59はやや深く窪んでいる。

61は、円盤状の土製品で碁石形土製品と思われるが、その用途は不明である。器面には雲母が多く付着している。

62は、形状から匙形土製品とした。胎土は、精緻で焼成も堅緻で他の土製品とは一線を画する。実用品か模倣品か不明である。

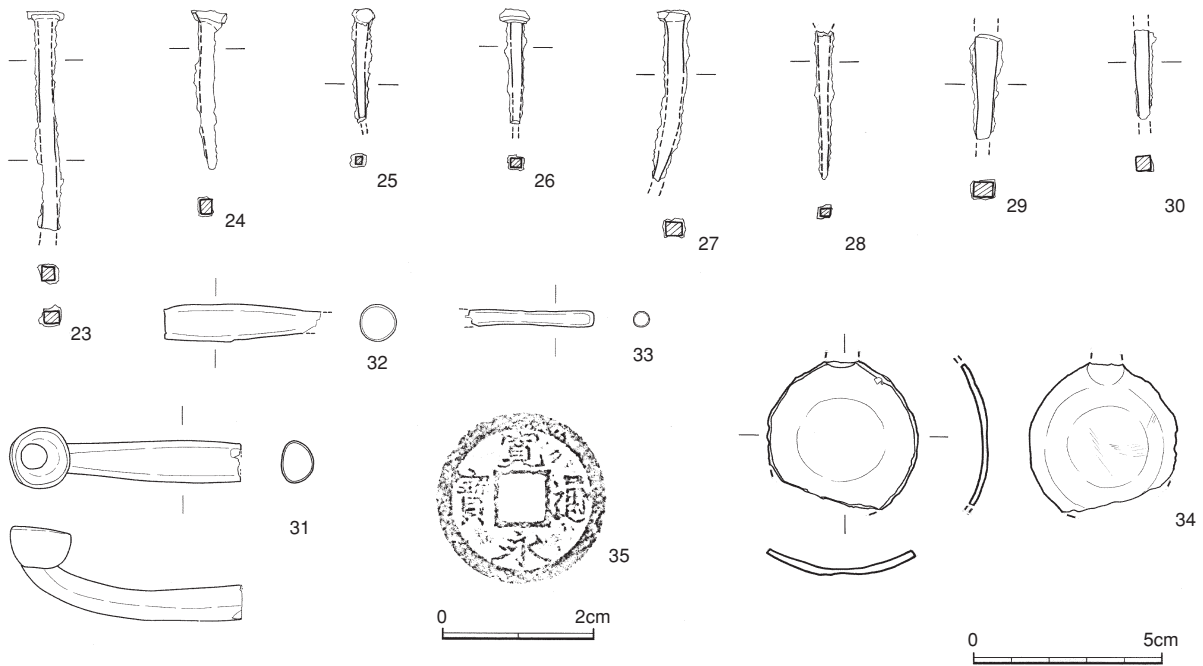
第4節 2区の調査成果

1 2号道路跡

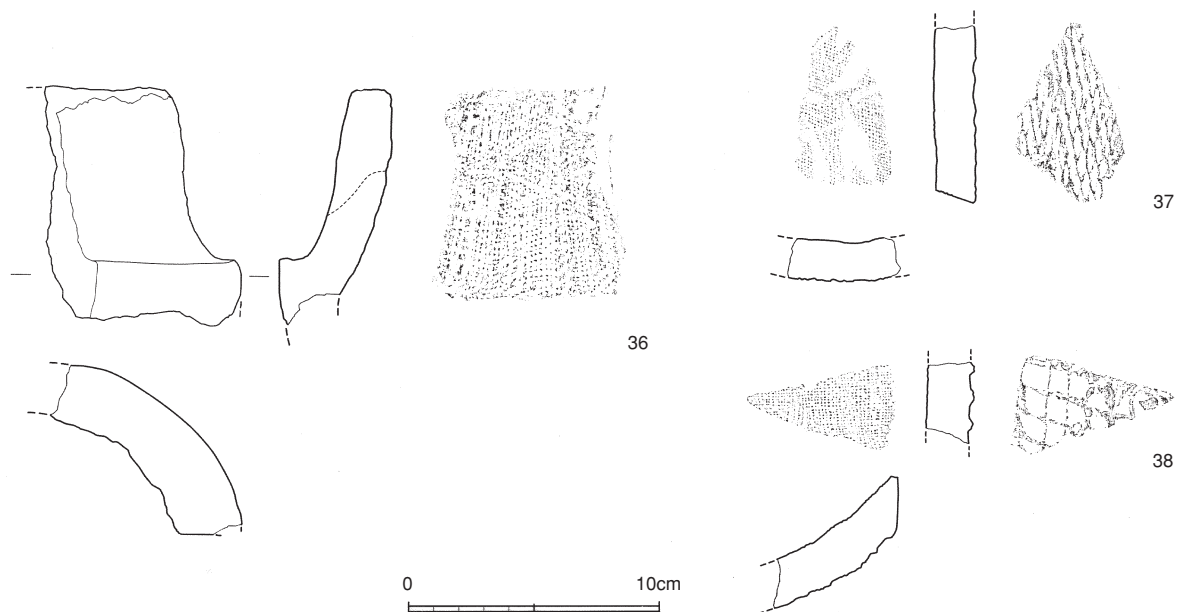
遺構（第15図・図版12～15）

調査区北端に位置する。VI層上面で検出した。1区と異なり、上面はさほど削平されていない。一部のみの検出で南側の掘り方のみかろうじて確認できるが、大半は調査区外へと延びており、本来の規模や形状は不明である。確認できる範囲では、長さ4.5m、幅4.5m、深さ0.32mを測る。東西方向に走っているように見えるが、実際は西北西から東南東というところであろうか。

検出当初は、竪穴遺構として調査していたが、床面と思しき面から明瞭な硬化面が1条検出されたことから、道路跡と判断した。南側の掘り方を精査していたところ、土坑状の窪みに礫が集中している箇所を検出した。別遺構の可能性もあったが、埋土の状況を確認したところ明確な切り合い関係は認められなかったので道路跡に伴うものとし、一括して2号道路跡とした。



第12図 1区出土遺物実測図3



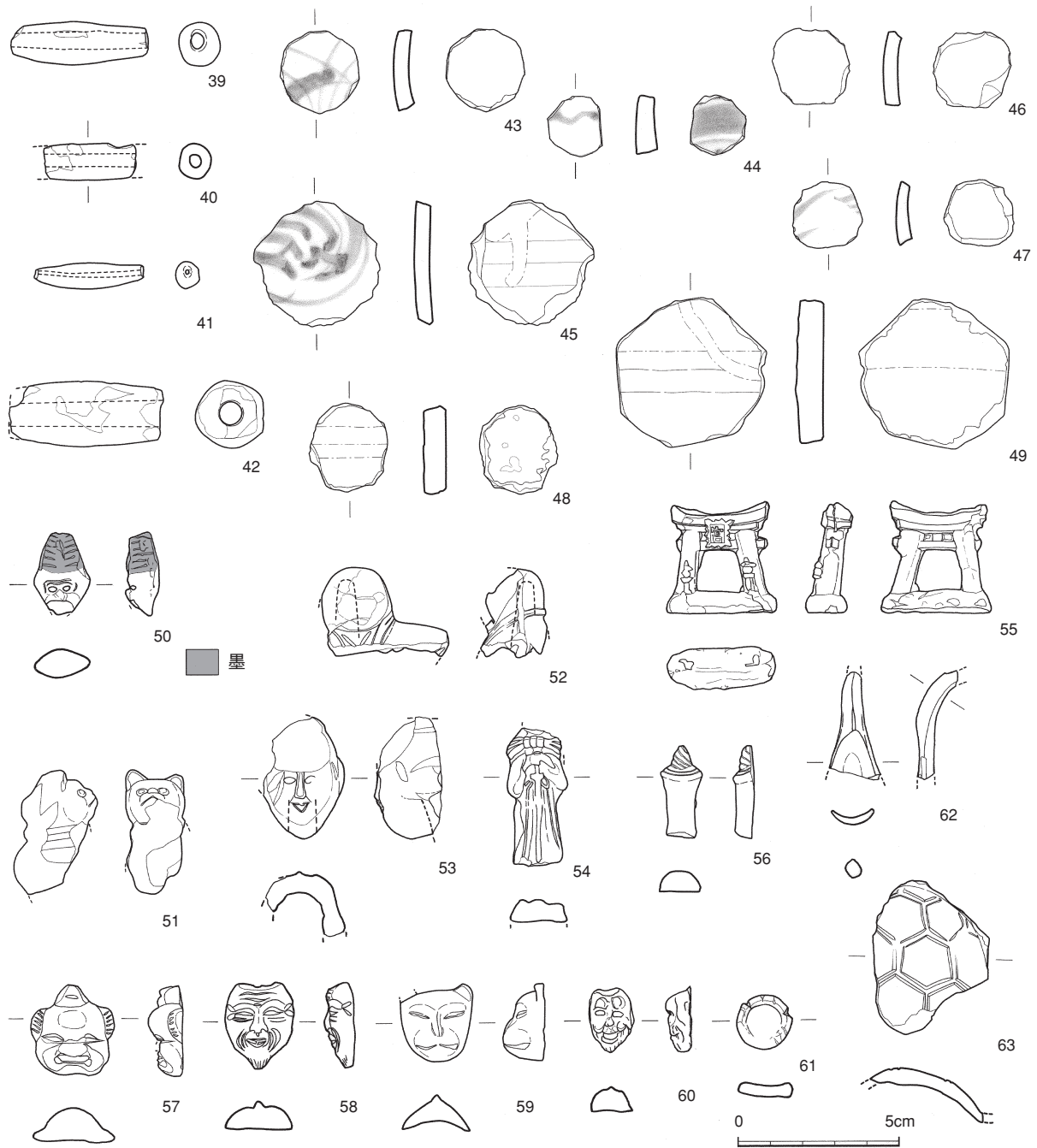
第13図 1区出土遺物実測図4

硬化面は、平らというよりやや凹んでおり、30～50cmの幅で掘り方に平行して走っていた。掘り方の底が一部下層（Ⅶ層＝ニガ土）に達しているせいか、場所によってはかなり硬化していた。他にも数箇所やや硬化した部分があったものの、範囲が不明瞭であったため図示には至らなかった。

礫集中部は、径80～100cmの不整円形の窪み（又は掘り込み）に礫、布目瓦片、須恵器片が密集していた。その多くは礫で、遺物は少数であった。焼土や礫の赤変化といった火を使用した痕跡は確認できなかった。

なお、平坦面には小石（1～2cm）が散漫と広がっていた。調査区外から混じりこんだ可能性は低く、精査中に確認されたことから、人為的に敷いたか道路として使用時に入り込んだ可能性も考慮しておく。

埋土は、1層のみで前述したとおり礫集中部にも同様の埋土が認められた。



第14図 1区出土遺物実測図5

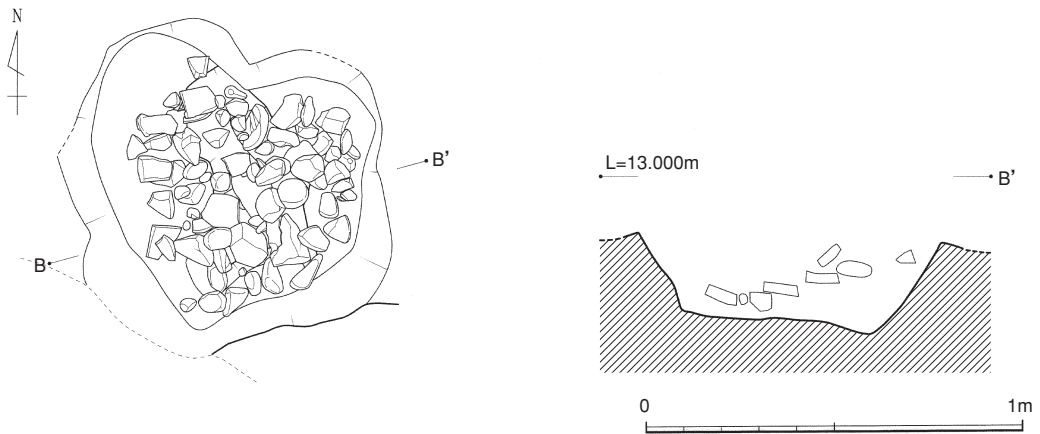
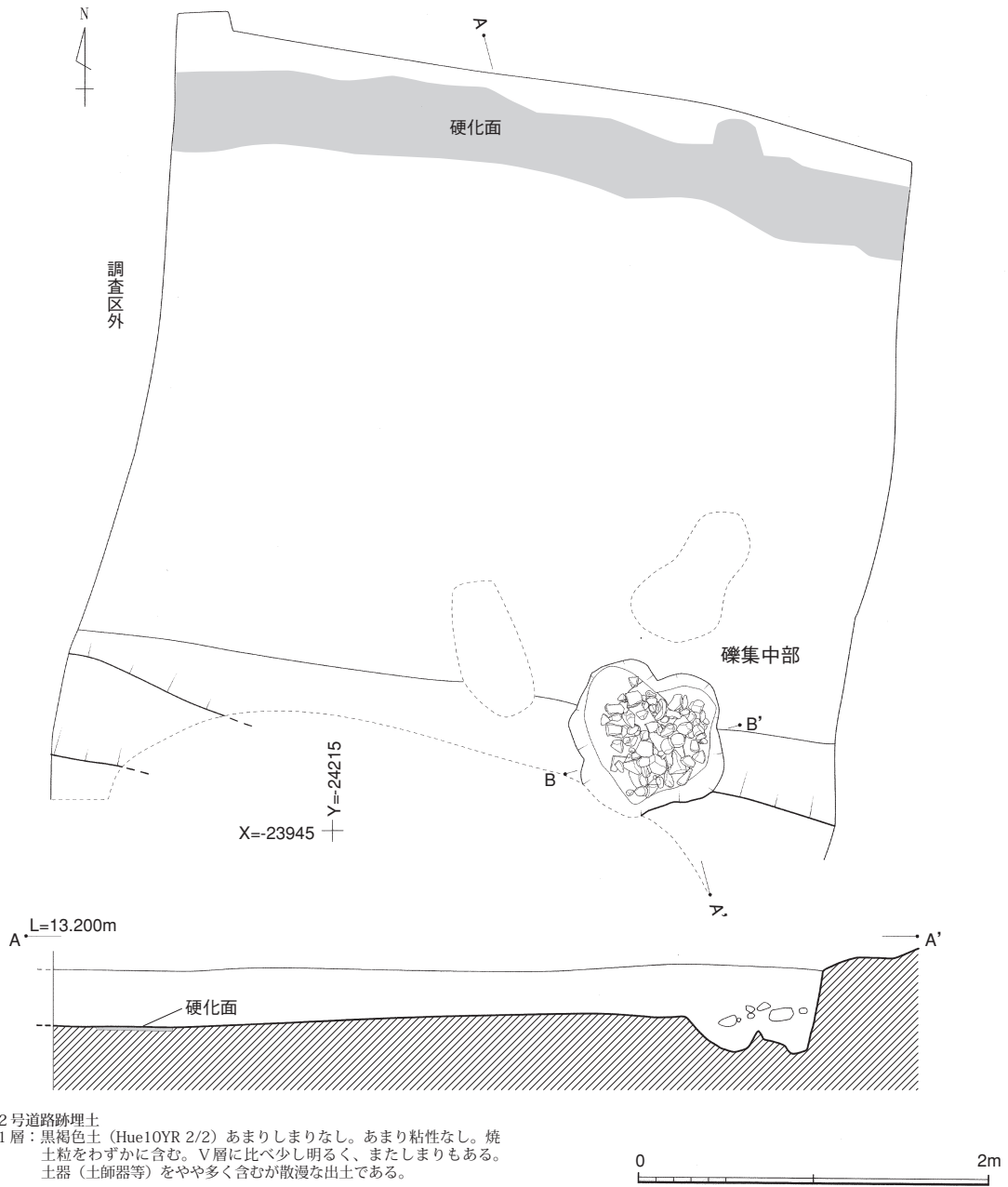
遺物（図版24）

出土遺物については、ここでは出土状況等について概略を述べたい。礫集中部より須恵器、布目瓦、その他の遺構埋土より弥生土器、土師器、須恵器、布目瓦、石器が出土した。礫集中部の遺物は、礫に混入していたような出土状況であり、埋納・埋設したようなものではない。いずれも小破片のみで、遺構の性格や時期を特定するのは困難である。

なお、礫集中部を含む2号道路跡の出土遺物の大半については、写真のみの掲載としている。

2 出土遺物

2区の出土遺物の傾向は、基本的に1区のそれと同じである。ただ遺物包含層がほとんど消失していた1



第 15 図 2 号道路跡実測図

区に対して、2区は比較的良好な状態で保存されていた。そのため、1区の1割強しかない調査面積にも関わらず、1区の7割程度に上る遺物が出土している。

土器・陶磁器類（第16図・図版19）

1は、弥生土器である。大振りな口縁の破片で甕か鉢と推測される。

2～4は、土師器である。2は、椀で高台～底部のみである。3・4は、小皿で1/4程度残存している。底部は糸切り離しで、4の見込には煤が付着している。

5・6は、須恵器である。どちらも甕の口縁から肩部にかけての破片である。肩部外面には格子状タタキ、内面には同心円当具痕が残る。口縁部外面には、工具痕と思しきものが横ナデで消えきれずに残っている。

石器類（第17図・図版19）

7は下端を刃部とするスクレイパーか。8は、二次加工のある剥片か。側縁を加工している。

9は、使用痕のある剥片か。今回の調査では貴重な黒曜石製の石器である。

10は、石錘である。表面中央に明瞭な紐の擦痕が認められるほか、端部にもわずかに擦痕が見られる。

11・12は、器種不明の磨製石器である。器面には研磨痕と思しき調整痕が見られるが、器種や時期は不明である。

13は、砥石の破片である。天草陶石のような石質である。1区出土の砥石と同様の石材と考えられる。

14は、碁石か。1区では白石であったがこちらは黒石であろうか。器面には研磨した痕跡が見られる。

金属器類（第18図・図版19）

15～17は、鉄釘である。基本的には1区で出土した釘と同様、和釘の頭巻釘である。17は、完形と見られるが軸が変形している。

瓦類（第19、20図・図版20～22）

布目瓦が大半である。棧瓦も1点（31）出土している。いずれも小片が多い。

18・19は、丸瓦である。18は、丸瓦の端面付近の破片である。19は、玉縁を欠くが大型の破片で凸面の叩き痕はナデ消されている。

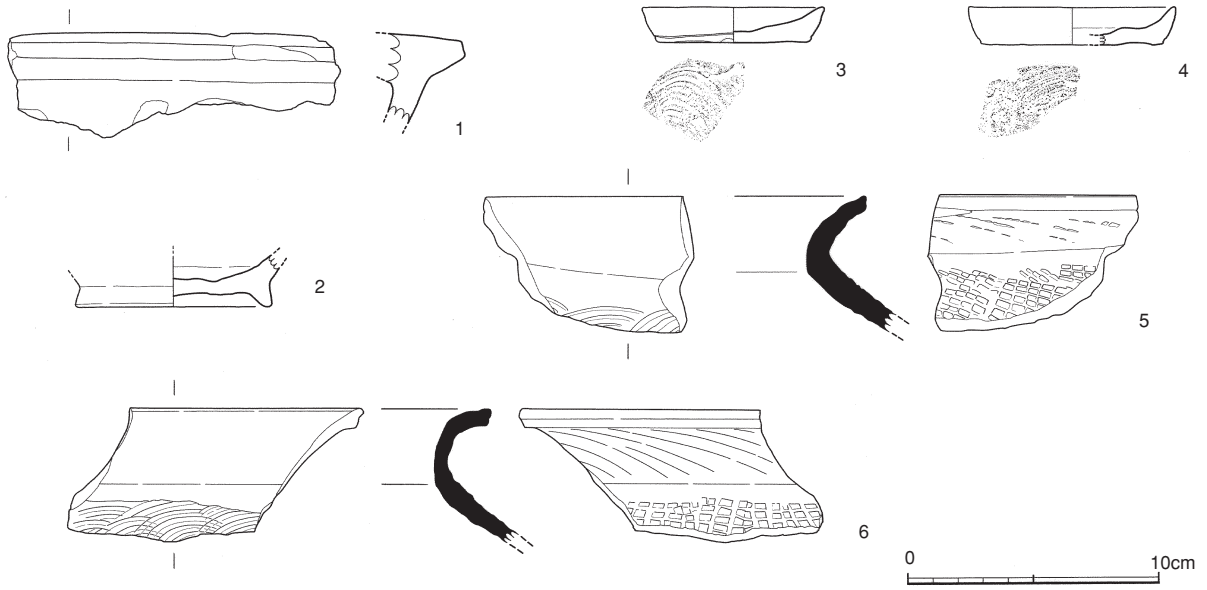
20～30は、平瓦である。破片資料のみだが特徴的なものを取上げてみた。凸面の叩きは、縄目叩きが大半を占めるが、格子叩き（28）や斜格子叩き（29）も少数存在する。叩き後に一部ナデを施す場合もあるが（21・23）、中には叩き痕がきれいに消されているものもある（30）。叩き具の単位の痕跡が比較的良好に残るもの（24・27）もあるが、完形品ではないので瓦の作業工程を推測するには至らない。凹面は布目痕が残るものばかりだが、個体によって布目の粗密の差が認められる。粗いもの（28・30）は1cm四方当たり5×5本程度、細かいもの（19・23）は8×8～10本を数える。側面はナデ調整したものが多いが、ケズリ調整したもの（27）や面取りしたもの（22・26）もある。焼成は、堅緻なもの（23）もある一方、焼きが甘いもの（19・24・28）も目につく。

31は、棧瓦と思しき破片で軒丸部分の三巴文のみ残存している。

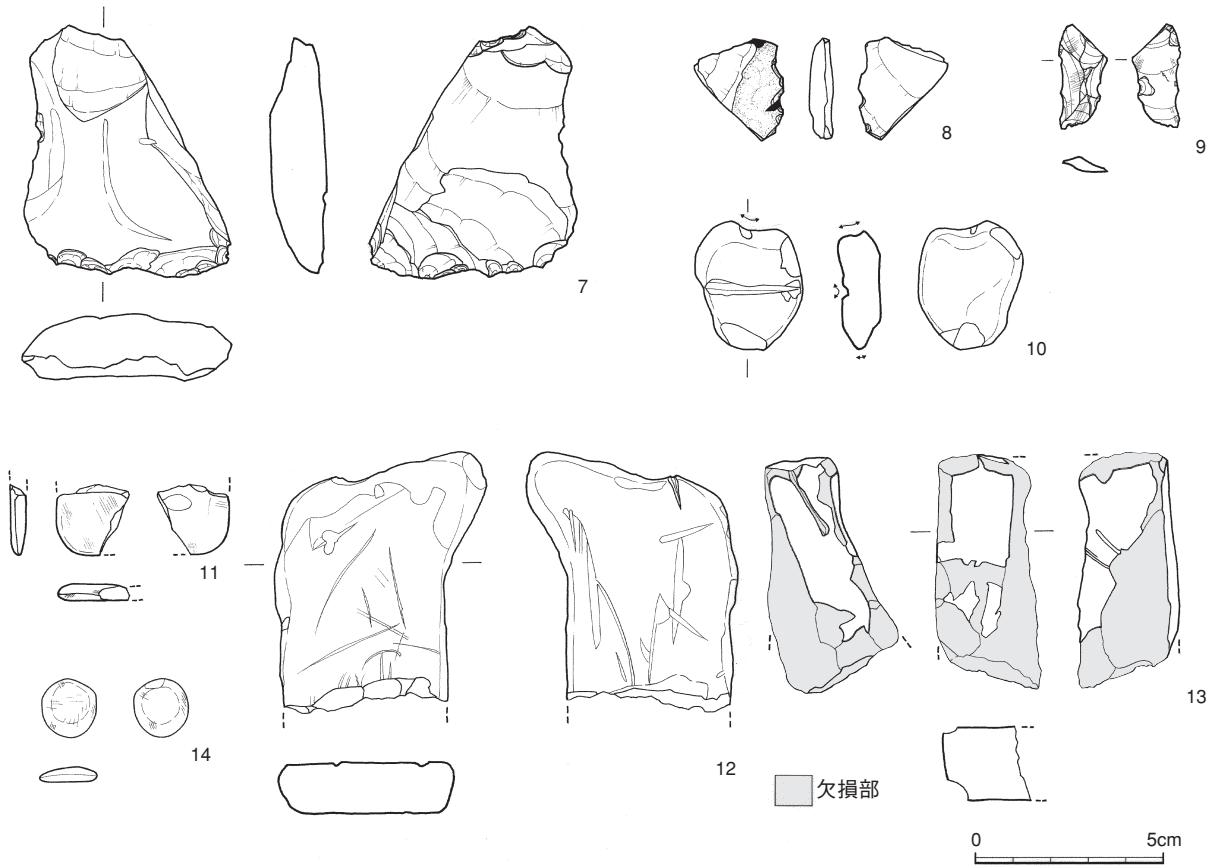
土製品類（第21図・図版23）

32・33は、土錘である。32は、端部に紐の擦痕が見られる。

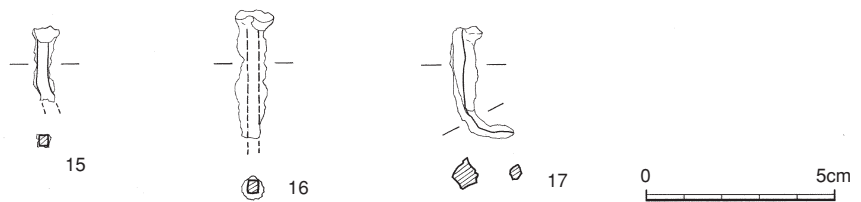
34は、土器片を転用した土器片錘である。端部に紐を巻きつけた際の擦痕らしき凹みが見られる。



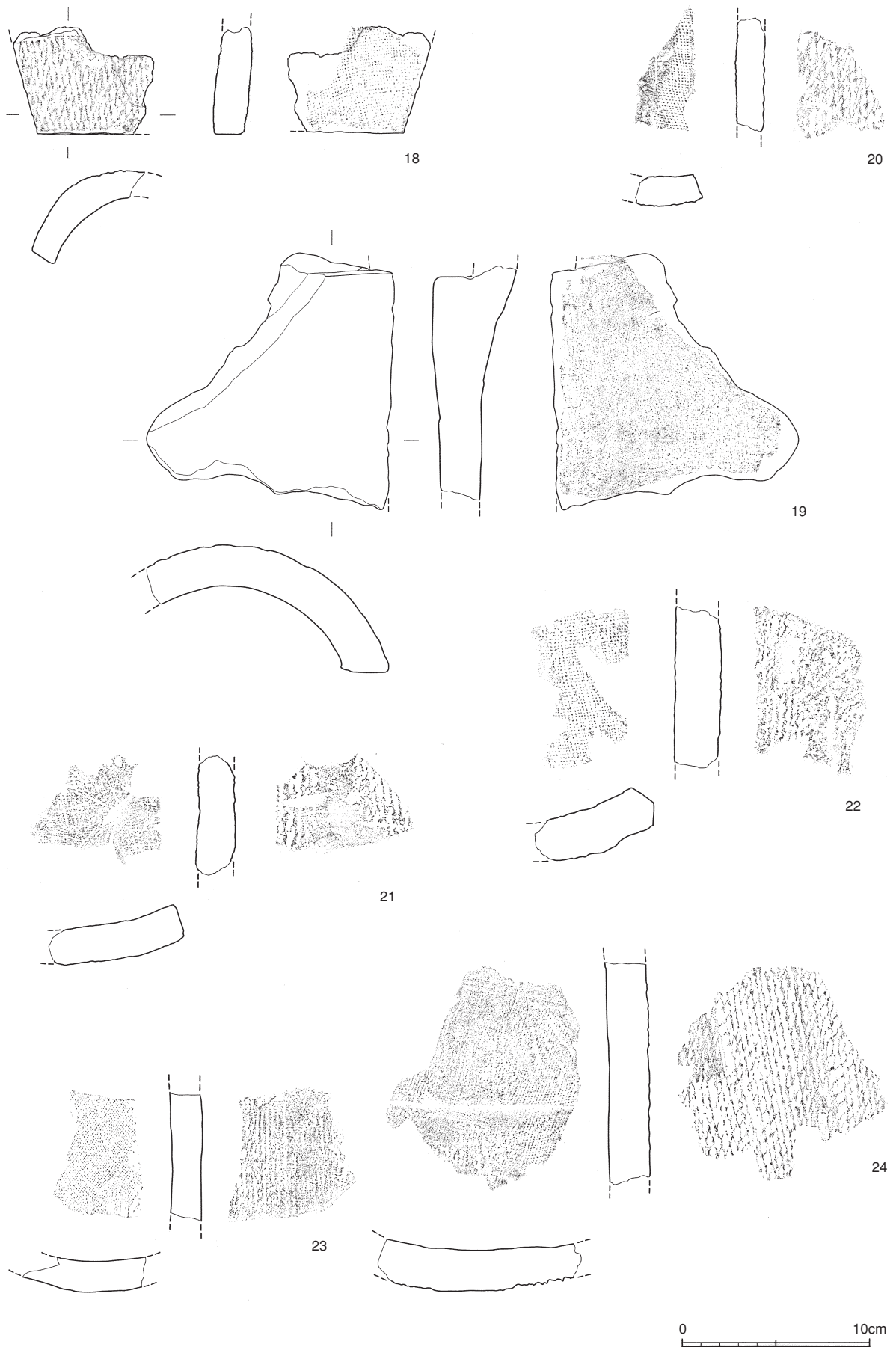
第16図 2区出土遺物実測図1



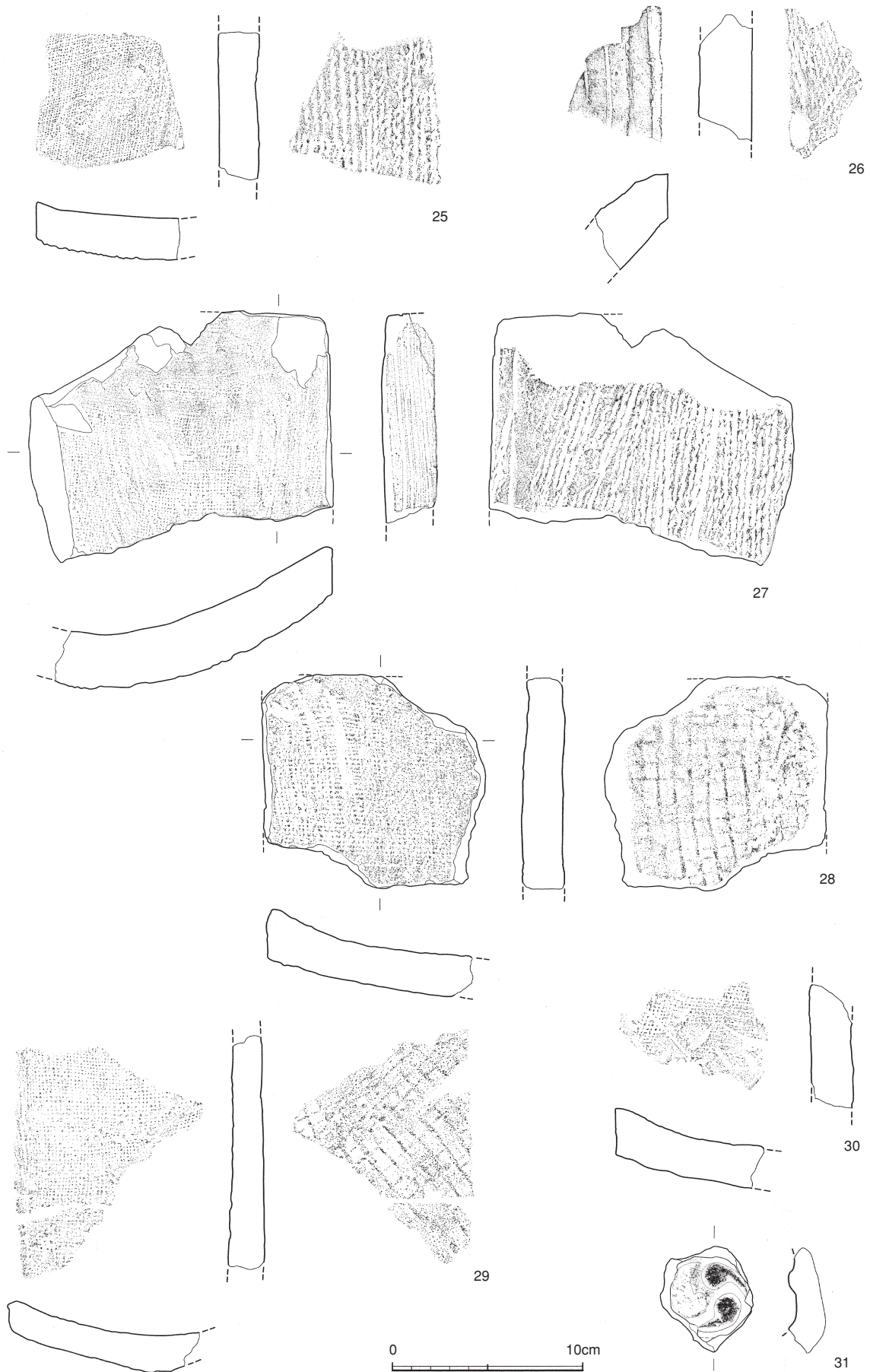
第17図 2区出土遺物実測図2



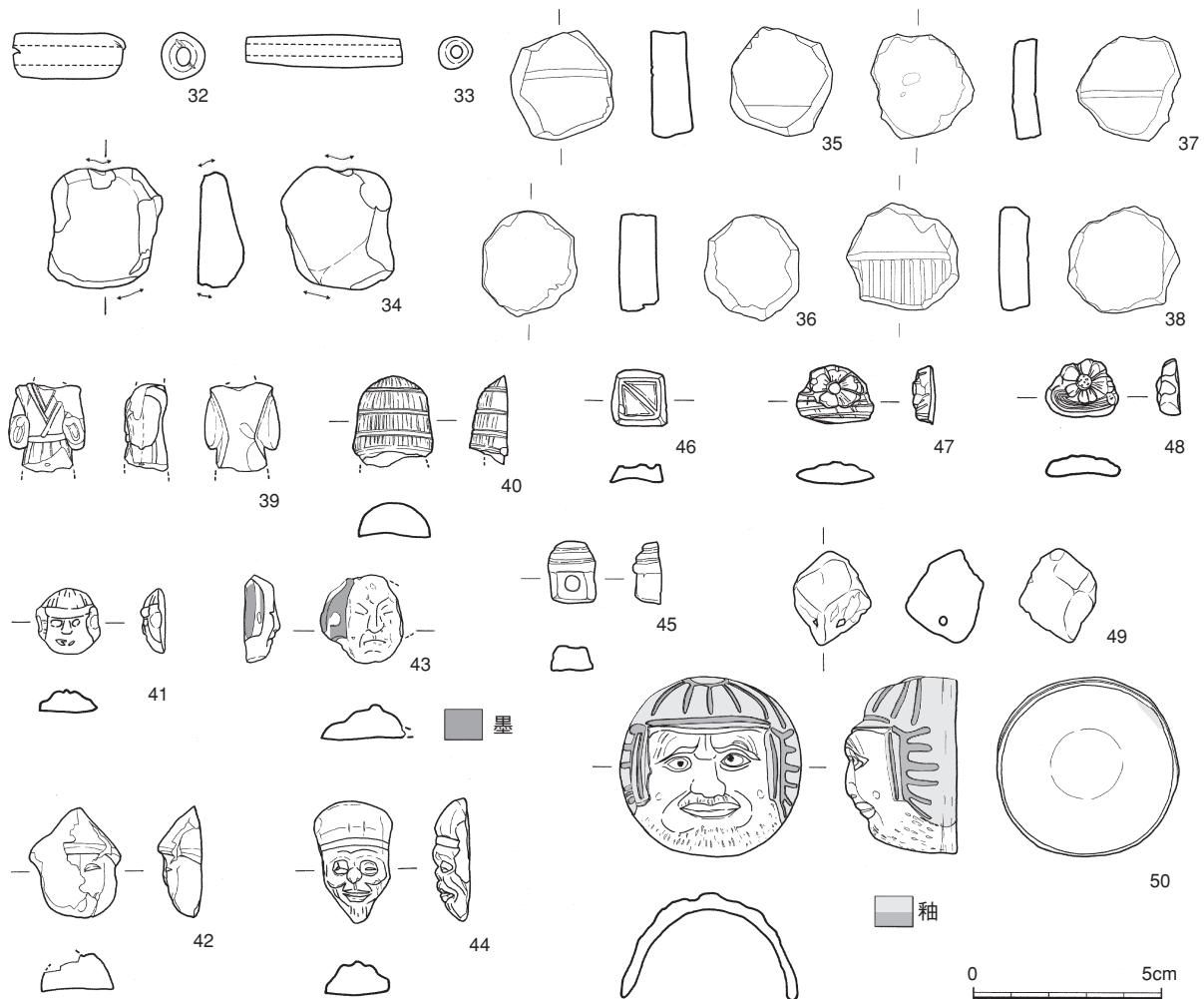
第18図 2区出土遺物実測図3



第19図 2区出土遺物実測図4



第20図 2区出土遺物実測図5



第21図 2区出土遺物実測図6

35～38は、陶磁器片転用品である。端部は、明らかに加工しており、自然の摩滅とは異なる。

39は、土人形である。頭部と脚部を欠損しているが裃人形であろう。型合わせで、胴部下端には穿孔が確認できる。

40～46は、芥子面である。40は、虚無僧である。深編笠のみ残存しているが、本来は顔の下半分があったと推測される。41は、細部がやや摩滅しているが鎧武者であろうか。芥子面の中でも小型の部類に入る。42は、表面の半分近く欠損しているが風貌から異邦人と考えられる。43は、右側縁を欠損しているが役者か。少し分かりづらいが頭髪部は黒く着色している。44は、翁で頭には頭巾らしきものを被っている。45は、小型だが、供物台である三方を横している。細部は省略されているが鏡餅を供えているようだ。46は、体積を量る枡か、井戸で水を汲む釣瓶を上から見たものか。なじみのない形状であり判断に悩む。

47・48は、泥面子としておく。本来、泥面子とは芥子面や面摸、面打等の土製の面を基調とした玩具の総称として用いているが、これらは器種が判然としないため、あえて「泥面子」と呼称しておきたい。どちらも菊花が流水に浮かび出た形の菊水紋を表しているようだが、流水の形状に違いが見られる。

49は、土製品というより焼成粘土塊である。下部に穿孔もしくは軸の痕跡があり、その部分はやや変色している。

50は、近代以降の面盃である。毘沙門天を模った外面で内面と外面の冑部分に釉薬が塗ってある。型押しで作られており、内面には押圧痕が残っている。あまり精巧な作りとはいいがたく、大量生産品であろう。

第IV章 総括

本来、調査区ごとで総括するべきだが、遺構以外では調査区間の相違が小さいため、遺構、遺物そして全体的なまとめをもって総括としたい。

第1節 遺構

1区では、溝状遺構1条、土坑3基、小穴3基を検出した。土坑、小穴については、残存状況が悪いため省略する。溝状遺構について調査成果をまとめてみたい。

溝状遺構については、その全体像さえ明らかにできなかったため多くを語ることはできないが、検出した限りでは、溝状を呈する遺構であるのは間違いない。ただその機能・用途については、区画用の溝（あるいは道路？）を想定するのが適当と考えられるが、検出状況だけでは決め手に欠ける。出土遺物を見ても複合遺跡らしく幅広い時代の遺物が出土したものの、小片かつ流れ込みのため機能を特定するには至らなかった。大正から昭和初期の地図を見ても該当するような道や溝は確認できなかった。もっとも、より小さな縮尺の絵図・地図があればあるいは確認することができるのかもしれない。

では、いつ頃造られたものなのだろうか。残念ながら今のところ不明である。ただ、埋没した時期については、ある程度特定できる。県立商業学校（県立熊本商業高等学校の前身）が今の場所に移転したのは昭和6年だが、その際校舎を新築したのではなく、以前から建っていた県立第二師範学校の施設を利用したという。そしてその県立第二師範学校は、大正3年に開校している。溝状遺構の埋土を切っていたのは、この当時の建物（旧校舎）の基礎であることから、遅くとも大正時代には埋没していたと考えるのが妥当であろう。近世から近代の所産と考えられる土人形や芥子面が、埋土上層からのみ出土している点もこのことを裏付けていると言えよう。そしてこうした状況から旧校舎建設と溝状遺構の埋没の時期差については、数年か十数年程度の比較的短期間（明治年間～大正初頭）を想定した方が適当である。あるいは、埋土上層の1～3層は一気に埋没した感もあるので、建設工事に先立ち溝状遺構を埋め立てた可能性もある。

2区は、道路跡1条のみである。道路跡とした根拠として直線的に走る硬化面の存在がある。周辺の神水遺跡の発掘調査でもこうした硬化面は確認されているわけだが、ここで注目したいのが今回検出した2号道路跡は、周囲より一段掘り込んだ面に硬化面が検出された点である。これは、道路工事で用いられる所謂「切り通し工法」によって造られた可能性を示唆しているとも言える。仮にそうだとするとより本格的な道路を想定する必要があるだろう。

近年、熊本市教育委員会の発掘調査によって大江遺跡群を中心に古代の官道である西海道駅路をはじめその支路と思しき遺構が検出されている。これらは幅10m以上を測り、側溝や小穴群（柵？）を伴う本格的な構造である。また、路床部には硬化面や盛土、それに波板状凹凸面もしばしば確認されている。駅路本路の推定線としては、大江遺跡群の中央を縦断し、出水国府跡と国分寺跡の間を抜けるルートが有力であるが、他にも二本木遺跡群（飽田郡衙推定地）から出水国府跡、国分寺跡、国分尼寺跡（陳山麿寺跡）の近くを通り益城郡や阿蘇郡へと延びる道路（阿蘇大路）が駅路本路と交わる形で想定されている。駅路本路については、大江遺跡群の他に黒髪町遺跡群等の発掘調査によってもその様相が徐々に明らかになってきているが、それ以外の道路について考古学的検証作業は、あまり進んでいない。

熊本市教育委員会の調査報告書によれば、阿蘇大路推定線は現在の県庁通りに重複するように設定されている（註1）。もし多少南北にずれるようなことがあり得るのならば、今回検出した道路跡が阿蘇大路の一部になる可能性も皆無ではないだろう。ただ、本調査に係る調査範囲及び期間が限られており、その全容を窺い知るには情報不足感が強く、結論付けるのは早計であろう。あくまで可能性の提示に留めたい。（第22図）

第2節 遺物

出土遺物については、数量的には近世陶磁器片が多いが、小片のため産地や時期についてははっきりしない。土器類では、時期的に弥生時代中期、古代（9世紀代）が目立つが、これは神水遺跡の主要な時期と重なりと言える。小片ながら墨書土器や両黒土器（黒色土器B類）の存在も確認されており、包含層及び流れ込みの遺物が大半ながら、神水遺跡らしさが目立つ内容であろう。

石器類は、点数が少ないものの縄文時代の打製石斧から近世の石硯や碁石が確認されており、バラエティー豊かな内容である。砥石の中には、天草砥石のような細目のものと、砂岩製の粗目のものがある。同時期のものは分からないが、仮に使い分けをしていたとすれば興味深い。

金属器類については、器種がはっきりしないものを除けば、19世紀代位に比定される煙管の雁首が目につく。吸口も出土しており、同一個体の可能性もある。

瓦類については、軒瓦の出土は確認されていないためその評価は難しい。1、2区ともに出土しているが、特に2区に多く、中でもV層とV層直下の2号道路跡内埋土に集約されるようで、これらの大まかな堆積時期を示しているとも言える。周辺には国府、国分寺、そして国分尼寺と古代の瓦葺建物を有したであろう施設が点在しており、これらから拡散・流入したと考えられる。

土製品類については、これまであまり着目されることのなかった土人形や芥子面といった、土製遊戯具について少し触れてみたい。今回図示した土製遊戯具は23点である。器種認定にやや不安もあるが、その内訳は、土人形7、箱庭道具1、泥面子（芥子面含む）14、その他1というもので、泥面子類が全体の2/3近くを占める。土人形は破片のみだが、型合わせて製作されているのが分かる。中空（1区51・52・53）と中実（1区50・54、2区39）があるが、小型品は中実、それ以外は中空という傾向が見受けられる。泥面子類は、大半が芥子面である。注目すべきは、泥面子類の多くが木葉猿窯産の可能性がある（註2）という点である。

「木葉猿」で有名な木葉猿窯だが、近年江戸時代に使用していたとみられる泥面子の土製抜き型が発見され話題となった。今回出土した芥子面の中にも木葉猿窯で発見された抜き型と酷似した形態のもの（1区56、2区40・45）がある。形態以外にも胎土や焼成から判別されるが、土人形については、芥子面の可能性のあるもの（1区50・54）以外は木葉猿窯産ではないとのことで、特定の土製遊戯具のみ生産していた可能性を窺わせる。江戸時代には数軒の窯元が存在したと言われており、木葉猿窯産の泥面子が広く県内に流通していたのかもしれない。もっとも、それを裏付けるには証拠が不十分であるので、今後の類例の増加と研究の進展に期待したい。

なお、土製品類の中にある「面盃」について、あまり馴染みのないものなので少し触れておく。面盃とは、可杯（べくはい）の一種で、宴席において使用される、注がれた酒を飲み干すまで下に置けない杯のことである。翁、嫗、天狗、ひよっこ、七福神等さまざまな種類がある。杯の種類によって飲み干す酒の量が異なるのが特徴で、どの杯を使うかで宴席は大いに盛り上がっていたのだろう。本来は、数個で1セットとなっていたようだが、今回出土したのは1個のみである。宴席の座興としては、球磨地方に伝わる「球磨拳」が有名だが、この面盃が果たして球磨拳において使用されたかどうかは定かではない。

第3節 まとめ

神水遺跡は、これまでの調査成果から江津湖畔から主要地方道熊本高森線（通称電車通り）辺りまでは弥生時代、県庁通り辺りから北方は、古代が主要な時代とされている。今回の調査区はその中間に位置しており、本来なら両方の時代の遺構・遺物が多く見つかるはずだったが、近代の開発によってその多くは既に消失する結果となった。そうした状況下で、部分的ながら、道路跡と思しき遺構を検出できたのは幸運と言える。

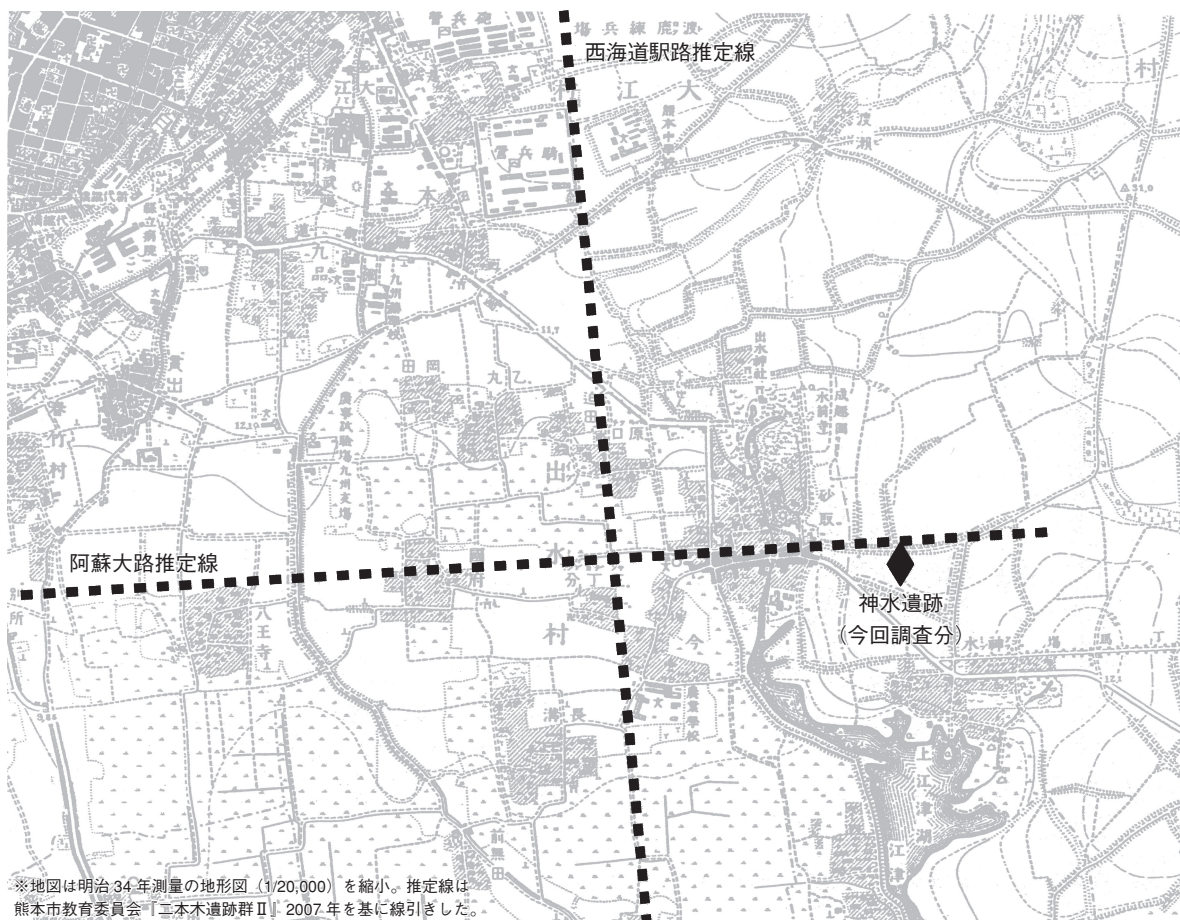
る。さらに、阿蘇大路推定線との関係如何では、その重要性が大きく変わる可能性もある。1区で検出した溝状遺構も、時期特定が困難でその評価に悩むところだが、近代以降の土地利用の変遷を窺わせるものである。

遺物については、原位置を留めない小片が大半だが、その中でも泥面子（芥子面）や土人形が比較的まとまって出土したのは注目すべき点と言える。特に芥子面において、その多くが木葉猿窯産と推定されたのは意義深いことである。今回出土した芥子面と類似するものが、当時の抜き型の中に存在するのはその証左とも言える。出土すること自体は珍しくなかったせいか、これまで特筆されることのほとんどなかった泥面子類を始めとする玩具類についても、改めて着目する必要があるだろう。従来、弥生時代や古代に重きが置かれていた神水遺跡だが、今回の調査でそれ以外の時代、特に近世以降の文物に光を当てられたのは重要な意味を持つ。

神水遺跡の調査も熊本県実施分だけで11回を数え、これまでの調査成果の取りまとめや検討の必要性に迫られている。多くの課題はあるものの着実に遂行していくことが求められている。

註1：熊本市教育委員会「大江遺跡群第11次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集』—平成15年度—2004年
熊本市教育委員会『二本木遺跡群Ⅱ』2007年

註2：泥面子類の鑑定は、永田禮三氏（木葉猿窯 窯元）によるものである。



第22図 西海道駅路及び阿蘇大路推定線位置図 (S=1/25,000)

参考・引用文献一覧

- ・熊本日日新聞社熊本県大百科事典編集委員会編『熊本県大百科事典』 1982年
- ・山本信夫「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」『乙益重隆先生古稀記念 九州上代文化論集』 1990年
- ・新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 別編 第一巻 絵図・地図 下 近代現代』 1993年
- ・網田龍生「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』X 1994年
- ・美濃口雅朗「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究』X 1994年
- ・中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 1995年
- ・玉東町史編集委員会『玉東町史 通史編』 1995年
- ・熊本商業高等学校編『熊本商業高校創立百周年記念 熊商百年史』 1996年
- ・江戸遺跡研究会編『図説 江戸考古学研究事典』 2001年
- ・矢部良明 他『角川 日本陶磁大辞典』 2002年
- ・大阪府立近つ飛鳥博物館編『年代のものさし—陶邑の須恵器—』大阪府立近つ飛鳥博物館図録40 平成17年度冬季企画展 重要文化財指定記念 2006年
- ・近江俊秀『道路誕生 —考古学からみた道づくり』 2008年
- ・熊本市教育委員会『神水遺跡』 1986年
- ・熊本市教育委員会『神水遺跡Ⅱ』 1993年
- ・熊本市教育委員会『神水遺跡Ⅲ』 2000年
- ・熊本市教育委員会『神水遺跡Ⅳ』 2001年
- ・熊本市教育委員会『神水遺跡Ⅴ』 2003年
- ・熊本市教育委員会『神水遺跡Ⅵ』 2004年
- ・熊本市教育委員会『神水遺跡Ⅶ』 2005年
- ・熊本市教育委員会『神水遺跡Ⅷ』 2006年
- ・熊本市教育委員会『神水遺跡Ⅸ』 2007年
- ・熊本市教育委員会『神水遺跡Ⅹ』 2008年
- ・熊本市教育委員会『二本木遺跡群Ⅱ』 2007年
- ・熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報』第1号—昭和63年度～平成3年度— 1995年
- ・熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報』第2号—平成4年度～平成8年度— 1999年
- ・熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報』第3号—平成9年度～平成10年度— 2000年
- ・熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報』第4号—平成11年度— 2001年
- ・熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報』第5号—平成12年度～平成13年度— 2003年
- ・熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報』第6号—平成14年度— 2004年
- ・熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報』第7号—平成15年度— 2005年
- ・熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報』第8号—平成16年度— 2006年
- ・熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財調査年報』第9号—平成17年度— 2007年
- ・熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集』—平成13・14年度— 2003年
- ・熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集』—平成15年度— 2004年
- ・熊本市教育委員会『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集』—平成16年度— 2005年

表 4 遺構一覧

調査区	遺構名		種別	時代	検出層	残存度	規模(m)			出土遺物		備考
	(調査)	(報告)					長さ	幅	高さ(高さ)	有無	内容	
1区	S001	1号溝状遺構	溝	～近代	Ⅲ層	不明	25.0+	4.9+	1.4～2.0	有	弥生土器 土師器 須恵器 瓦 陶磁器 石器 土製品 金属器	一部のみ検出
1区	S002	2号土坑	土坑	不明	Ⅲ層	1/2以下	1.8	0.7+	0.27+	無		旧校舎基礎により半壊 上部削平
1区	S003	3号土坑	土坑	不明	Ⅲ層	一部	0.45+	0.65+	0.08+	無		大半が削平
1区	S004	4号土坑	土坑	不明	Ⅲ層	一部	0.14+	0.6+	0.05+	無		大半が削平
1区	P001	1号小穴	ピット	不明	Ⅲ層	一部	0.31	0.3	0.12+	無		上部削平
1区	P002	2号小穴	ピット	不明	Ⅲ層	一部	0.33	0.29	0.08+	無		上部削平
1区	P003	3号小穴	ピット	不明	Ⅲ層	一部	0.22	0.2	0.1+	無		上部削平
2区	S002	2号道路跡	道路	古代～	Ⅵ層	不明	4.5+	4.5+	0.32	有	弥生土器 土師器 須恵器 瓦 石器	一部のみ検出。硬化面1、礫集中部1

※数値の後に+の付くものは残存値

表5 出土土器等観察表

図版 No.	遺物 No.	調査区	クワッド名	遺構名		出土 位置	器種 器形	残存度	口径 (cm)	器高 (cm)	底部径 (cm)	色 調		調 整		焼成	胎土	備考
				(調査)	(報告)							外面	内面	外面	内面			
10	1	1区		1号溝状遺構	ハカ	弥生土器 甕	口縁:一部		3.2+			にぶい、黄褐色	口縁上:ミカキ 口縁:横ナ	横ナ ミカキ	良好	1mm以下の長石、角閃石、雲母等	外面に暗文?	
10	2	1区		1号溝状遺構	トシチ	弥生土器 甕	底:1/2		3.5+	6.4		にぶい、黄褐色	縦ナ	ナ	良好	1mm以下の石英、長石、雲母、角閃石等	脚台のみ残存	
10	3	1区		1号溝状遺構	中層	黒色土器 坏?	口縁:一部		2.5+			黒色	回転横ナ	ミカキ	良好	1mm程の形粒	阿黒だがミカキは内面のみ	
10	4	1区		1号溝状遺構	中層	土師器 坏?	胴:一部		2.7+			にぶい、黄褐色	回転横ナ	回転横ナ	良好	1mm程の石英、長石等	外面に墨書、字体不明。	
10	5	1区		1号溝状遺構	中層	土師器 碗	胴~底:1/3		2.8+	(6.0)		にぶい、黄褐色	高台:ナ 底部:アワ切	ナ	良好	2mm以下の石英、長石、角閃石等	外面に墨書、字体不明。	
10	6	1区		1号溝状遺構	中層	土師器 碗	胴~底:1/4		1.0+	(7.5)		明赤褐色	高台:ナ 底部:アワ切	不定ナ	良好	3mm以下の石英、長石、角閃石等	赤色顔料塗布	
10	7	1区		1号溝状遺構	中層	土師器 碗	底:1/2		1.3+	(7.2)		にぶい、黄褐色	高台:ナ 底部:アワ切	不定ナ	良	3mm以下の石英、長石、角閃石等		
10	8	1区		1号溝状遺構	中層	須恵器 碗	底:1/4		1.9+	(8.8)		黄灰色	高台:ナ 底部:アワ切	ナ	良好	1mm程の形粒		
10	9	1区		1号溝状遺構	中層	須恵器 碗	底:1/4		1.8+	(9.5)		暗灰黄色	高台:ナ 底部:アワ切	不定ナ	良好	1mm未満の形粒		
10	10	1区		1号溝状遺構	上層	瓦質土器 燈台?	胴~底:一部		4.7+			黄灰色	ナリ ナ	横ナ	良	1mm以下の長石、角閃石、雲母等	軟質	
10	11	1区		1号溝状遺構	中層	瓦質土器 鉢	口縁~胴:一部		6.4+			暗黄灰色	口縁:横ナ 胴:縦ナ	口縁:横ナ 胴:ナリ	良	2mm以下の長石、角閃石、雲母等		
10	12	1区		1号溝状遺構	下層	瓦質土器 鉢	口縁~胴:一部		5.6+			黄灰色	横ナ	横ナ	良	1mm以下の長石、雲母等	内面に描目、繡描文	
10	13	1区		1号溝状遺構	トシチ	瓦質土器 香炉	口縁:一部		4.6+			灰色	横ナ	横ナ	良好	精緻	外面に菊花文	
10	14	1区		1号溝状遺構	埋土	陶器 碗	1/4	(10.8)	7.3	4.0		暗オリーブ褐色	胴:施釉 底:ナリ	施釉	良好	精緻	腰部軸力キ取り	
10	15	1区	D2		カマシ	土師器 碗	胴~底:一部		2.2+	(6.7)		褐色	横ナ	ナ	良好	4mm以下の石英、角閃石等	接合痕残る	
16	1	2区	a2		V層	弥生土器 甕?	口縁:一部		3.5+			褐色	ナ	横ナ	良	4mm以下の石英、長石、雲母等	裏枯か	
16	2	2区	c2		V層	土師器 碗	底		2.0+	7.6		褐色	ナリ ナ	ナ	良	4mm以下の長石、雲母等	外面に煤付着	
16	3	2区	a1		トシチ	土師器 小皿	1/4	(7.2)	1.4	(6.2)		褐色	口縁:横ナ 底部:糸切	横ナ	良	1mm以下の長石、雲母等		
16	4	2区	c1		V層	土師器 小皿	1/4	(8.2)	1.5	(7.2)		にぶい、褐色	口縁:横ナ 底部:糸切	横ナ	良	2mm以下の石英、長石、雲母等	見込に煤付着	
16	5	2区	c1		V層	須恵器 甕	口縁~胴:一部		5.4+			浅黄色	口縁:横ナ 胴部:格子状凸	口縁:横ナ 胴部:同心円当具	良好	2mm以下の長石等		
16	6	2区	d2		トシチ	須恵器 甕	口縁~胴:一部		5.3+			赤褐色	口縁:横ナ 胴部:格子状凸	口縁:横ナ 胴部:同心円当具	良好	1mm以下の石英、長石、雲母等		

※カッコ書きは復元値、数値の後に+の付くものは残存値

表 6 出土石器観察表

図版No	遺物No	調査区名	ケリトノ名	遺構名		出土位置	遺物		長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	材質	残存度	備考
				(調査)	(報告)		器種	形式						
11	16	1区		S001	1号溝状遺構	埋土	打製石斧	刃部一部	6.5+	5.5+	42.78+	砂岩	刃部一部	
11	17	1区		S001	1号溝状遺構	西ノノ	刃小ハ?	完形	3.9	4.3	7.1	砂岩?	完形	
11	18	1区		S001	1号溝状遺構	上層	石錘	組の擦痕有	2.7	3.8	12.94	安山岩	完形	組の擦痕有
11	19	1区		S001	1号溝状遺構	埋土	砥石	一部	4.7+	5.9+	66.11+	流紋岩?	一部	天草砥石か
11	20	1区		S001	1号溝状遺構	トノ	砥石	完形	7.0	3.0	44.98	砂岩	完形	
11	21	1区		S001	1号溝状遺構	上層	基石	完形	1.6	1.4	1.92	結晶質石灰岩	完形	白
11	22	1区		S001	1号溝状遺構	上層	石硯	1/4	6.5+	3.4+	21.58+	粘板岩	1/4	砥縁を欠損。携帯用の小型品
17	7	2区	a1 a2	S002	2号道路跡	ハノ	刃小ハ?	完形	6.8	5.5	55.39	安山岩	完形	下端に刃部か
17	8	2区	c1			Ⅲ層	2次加工剥片?	一部	2.7+	2.4+	2.94+	安山岩	一部	右側縁を鋸歯状に加工か
17	9	2区	c1			Ⅲ層	剥片(使用痕)	完形	2.7	1.3	0.98	黒曜石	完形	左側縁に使用痕
17	10	2区				包含層	石錘	組の擦痕有	3.4	2.8	9.41	安山岩	完形	組の擦痕有
17	11	2区				清掃	磨製石製品	不明	1.9+	1.9+	2.11+	安山岩	一部	研磨痕有
17	12	2区	d1 d2			一括	磨製石製品	不明	6.9+	5.6	80.11+	安山岩	不明	研磨痕有
17	13	2区				Ⅱ～Ⅲ層	砥石	不明	6.3+	2.7+	53.58+	流紋岩?	不明	天草砥石か
17	14	2区				清掃	基石	完形	1.6	1.5	1.42	頁岩?	完形	黒

表 7 出土金属器観察表

図版No	遺物No	調査区名	ケリトノ名	遺構名		出土位置	遺物		長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	残存度	備考
				(調査)	(報告)		器種	形式					
12	23	1区	A4 B4	S001	1号溝状遺構	埋土	釘	頭巻	6.8+	0.4	4.6+	大半	
12	24	1区	A4 B4	S001	1号溝状遺構	埋土	釘	頭巻	4.2	0.4	2.0	完形	
12	25	1区	A4 B4	S001	1号溝状遺構	埋土	釘		3.0+	0.2	1.1+	大半	頭部欠損
12	26	1区	A4 B4	S001	1号溝状遺構	埋土	釘	頭巻	3.0+	0.3	1.47+	大半	
12	27	1区	A3 B3	S001	1号溝状遺構	上層	釘	頭巻	4.6+	0.8	3.82+	大半	やや変形
12	28	1区	A4 B4	S001	1号溝状遺構	上層	釘		3.9+	0.3	1.53+	大半	頭部欠損
12	29	1区	A4 B4	S001	1号溝状遺構	上層	釘		2.8+	0.6+	2.8+	一部	頭部欠損
12	30	1区		S001	1号溝状遺構	中層	釘?		2.4+	0.4+	1.4+	一部	
12	31	1区		S001	1号溝状遺構	西ノノ	煙管	雁首	6.2	1.7	9.22	完形	真鍮製
12	32	1区	A2 B2	S001	1号溝状遺構	西ノノ	煙管	吸口	4.2+	1.0	2.16+	1/2	真鍮製
12	33	1区	A2 B2	S001	1号溝状遺構	西ノノ	煙管	吸口	3.4+	0.5+	0.99+	1/2	32と同一個体か
12	34	1区		S001	1号溝状遺構	ハノ	不明金属器		3.9+	4.0	11.69+	一部?	円盤状。裏のような柄があったか
18	15	2区	c1			一括	釘	頭巻	2.0+	0.3	1.4+	一部	やや変形
18	16	2区				包含層	釘	頭巻	3.4+	0.3	2.8+	大半	
18	17	2区				包含層	釘	頭巻	(3.9)	0.3	2.33	完形	変形

古銭

図版No	遺物No	調査区名	ケリトノ名	遺構名		出土位置	遺物器種	初跡年	径 (cm)	重量 (g)	残存度	備考
				(調査)	(報告)							
12	35	1区		S001	1号溝状遺構	上層	寛永通宝	1626年	2.3	2.45	完形	

表 8 出土瓦観察表

図版No	遺物No	調査区名	ケラット名	遺構名		出土位置	種別	残存度	全長 (cm)	幅 (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	凸面		凹面		胎土	焼成	色調	備考
				(調査)	(報告)									叩きの有無	叩きの種類	布痕の状態	粘土雜目				
13	36	1区		S001	1号溝状遺構	トノテ	丸瓦	玉縁1/2	9.3+	7.6+	1.7~2.4	有	有	細目	5×6	有	1mm以下の砂粒	良好	灰黄色	布織り合わせ痕有	
13	37	1区		S001	1号溝状遺構	カマ	平瓦	一部	7.1+	4.5+	1.7	有	有	細目	7×8	無	1mm以下の砂粒	良好	にぶい黄褐色		
13	38	1区		S001	1号溝状遺構	一括	平瓦	一部	4.2+	4.7+	1.9	有	有	格子	8×6	無	2mm以下の砂粒多	堅緻	灰色		
19	18	2区	c1			IV層	丸瓦	一部	5.7+	6.0+	2.0	有	有	細目	6×7	無	3mm以下の砂粒多	良	にぶい橙色		
19	19	2区	d1			V層	丸瓦	一部	13.7+	12.8+	2.1~5.7	無	無		8×10	有	3mm以下の砂粒多	やや良	灰白色	凸面はナ	
19	20	2区	a2			IV層	平瓦	一部	6.0+	3.5+	1.6	有	有	細目	6×7	無	1mm以下の砂粒	良好	にぶい黄褐色		
19	21	2区	a1			V層	平瓦	一部	6.4+	7.2+	2.1	有	有	細目	6×5	無	2mm以下の砂粒多	良好	黄灰色	凹凸面ともナ	
19	22	2区	a2			V層	平瓦	一部	8.6+	6.7+	2.5	有	有	細目	6×6	無	3mm以下の砂粒多	良	にぶい橙色	側面を面取	
19	23	2区	c1			V層	平瓦	一部	6.3+	6.5+	1.7	有	有	細目	8×8	有	2mm以下の砂粒	堅緻	灰色	細目が一部ナ	
19	24	2区	c2			V層	平瓦	一部	11.7+	9.9+	2.1	有	有	細目	7×7	無	1mm以下の砂粒	やや良	にぶい黄褐色	凸面に斜具の痕跡	
20	25	2区	d1			V層	平瓦	一部	7.6+	7.6+	2.3	有	有	細目	7×7	無	1mm以下の砂粒	良	灰黄色		
20	26	2区				カマ	平瓦	一部	5.9+	5.4+	2.9	有	有	細目	不明	無	2mm以下の砂粒	良好	灰白色	側面を面取	
20	27	2区	d1			ナトノテ	平瓦	一部	11.0+	15.7+	3.0	有	有	細目	7×6	無	1mm以下の砂粒	良好	暗灰色		
20	28	2区	d1			V層	平瓦	一部	11.0+	11.1+	2.7	有	有	格子	5×5	無	3mm以下の砂粒多	やや良	にぶい黄褐色	布目やや粗	
20	29	2区				カマ	平瓦	一部	11.9+	10.5+	1.9	有	有	斜格子	6×6	無	10mm以下の小石	良	橙色		
20	30	2区	a2			V層	平瓦	一部	6.4+	8.1+	2.6	無	無		5×5	無	1mm以下の砂粒	良好	凸:暗灰色 凹:浅黄色	凸面はナ (指頭上痕有)	
20	31	2区				一括	棧瓦	一部									2mm以下の砂粒	良好	灰黄色	三巴文	

※「布痕の状態」の数値は、1 cm 四方で布目が何本確認できるかを表示 (好×コ)

表 9 出土土製品観察表

図版No	遺物No	調査区名	ケラット名	遺構名		出土位置	器種	形式	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	残存度	胎土	焼成	色調	備考	
				(調査)	(報告)												
14	39	1区	B5	S001	1号溝状遺構	埋土	土鉢		4.3	1.5		大半	1mm未満の砂粒	良好	橙色		
14	40	1区	B5	S001	1号溝状遺構	埋土	土鉢		3.9+	1.1		2/3	1mm程の砂粒	良	にぶい黄褐色	端部欠損	
14	41	1区	A4 B4	S001	1号溝状遺構	上層	土鉢		3.4	0.8		完形	1mm未満の砂粒	良好	にぶい褐色		
14	42	1区		S001	1号溝状遺構	下層	土鉢		4.8	2.1		大半	1mm程の砂粒	良	にぶい褐色	大型	
14	43	1区		S001	1号溝状遺構	上層	陶磁器片転用品		2.6	2.4	0.5		精緻		堅緻	灰白色	縁を加工
14	44	1区		S001	1号溝状遺構	上層	陶磁器片転用品		1.8	1.6	0.5~0.7		精緻		堅緻	灰白色	縁を加工
14	45	1区		S001	1号溝状遺構	上層	陶磁器片転用品		4.0	3.8	0.5		1mm未満の砂粒	堅緻	灰白色	縁を加工	
14	46	1区		S001	1号溝状遺構	上層	陶磁器片転用品		2.3	2.3	0.5		精緻		堅緻	灰白色	縁を加工
14	47	1区		S001	1号溝状遺構	上層	陶磁器片転用品		2.1	2.1	0.4~0.5		精緻		堅緻	灰白色	縁を加工
14	48	1区		S001	1号溝状遺構	上層	陶磁器片転用品		2.8	2.4	0.7		1mm未満の砂粒	良好	胎土:赤褐色 釉:灰白色 褐色	縁を加工	
14	49	1区		S001	1号溝状遺構	上層	陶磁器片転用品		5.5	5.5	0.9		1mm未満の砂粒	良好	胎土:赤褐色 釉:灰褐色	縁を加工	

図版No.	遺物No.	調査区名	ケラット名	遺構名		出土位置	器種	形式	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	残存度	胎土	焼成	色調	備考
				(調査)	(報告)											
14	50	1区		S001	1号溝状遺構	上層	土人形?	猿?	2.6+	1.8	1.1	頭部:1/2	精緻	良好	褐色	鳥帽子を黒く着色。上端に穿孔有。木葉炭産か
14	51	1区		S001	1号溝状遺構	上層	土人形	座猫	3.8+	1.8+	2.6+	1/2	1mm程の砂粒	良好	褐色	胴部は中空
14	52	1区		S001	1号溝状遺構	上層	土人形	土人形?	2.8+	3.9+	2.1+	頭~胴部:一部	精緻	良好	にぶい黄褐色	中空。中央に径6~7mmの穿孔有。鈍込みか。
14	53	1区		S001	1号溝状遺構	カマ	土人形	女性?	2.8+	2.5+	2.1+	頭部:1/2	精緻	良好	褐色	中空。中央に径6~7mmの穿孔有。外面にわずかに白土残る。
14	54	1区		S001	1号溝状遺構	上層	土人形	旅人?	4.3+	1.9+	0.7+	肩部以下:1/2	1mm未満の砂粒	良好	褐色	下端に穿孔有。木葉炭産か
14	55	1区		S001	1号溝状遺構	上層	箱庭道具	烏居	3.4	3.3	1.4	完形	1mm未満の砂粒	堅好	褐色~明赤褐色	両柱に穿孔有。器面を赤く着色
14	56	1区		S001	1号溝状遺構	上層	芥子面	蛸罎	2.9	1.3	0.7	完形	精緻	良好	にぶい褐色	木葉炭産か
14	57	1区		S001	1号溝状遺構	上層	芥子面	力士?	2.8	2.6	1.1	大半	精緻	良好	にぶい褐色	頭部は黒く着色。木葉炭産か
14	58	1区	A4 B4	S001	1号溝状遺構	上層	芥子面	翁	2.6+	2.1	0.9	大半	1mm程の砂粒	良好	褐色	木葉炭産か
14	59	1区		S001	1号溝状遺構	トシ	芥子面	狐	2.4	2.3	1.1	大半	精緻	良好	にぶい黄褐色	
14	60	1区		S001	1号溝状遺構	上層	芥子面	翁	2.0	1.3	0.8	完形	1mm未満の砂粒	良好	にぶい褐色	木葉炭産か
14	61	1区		S001	1号溝状遺構	上層	林石形土製品?		1.7	1.7	0.6	完形	精緻	良好	にぶい褐色	土製の碁石か。器面に雲母付着
14	62	1区	A4 B4	S001	1号溝状遺構	上層	匙形土製品?		3.3+	1.6+	1.3+	2/3	精緻	堅緻	暗赤褐色	実用品か飯事道具か不明
14	63	1区	B7 C7		土人形	上層	土人形	亀?	4.8+	3.6+	1.6+	一部	1mm程の砂粒	良好	浅黄褐色	外面に白土残る。内面に指頭圧痕有。
21	32	2区	a2			IV層	土錘		3.0+	1.2		大半	1mm程の砂粒	良好	灰黄色	両端に糸による擦痕
21	33	2区				カマ	土錘		4.2	0.9		完形	精緻	良好	褐色	
21	34	2区				包含層	土器片錘		3.2	3	1.2	完形	1mm程の砂粒	良好	浅黄褐色	土師器片を転用
21	35	2区				II~III層	陶磁器片転用品		2.8	2.6	1.1		1mm程の砂粒	良好	外:暗褐色 内:褐灰色	縁を加工
21	36	2区				包含層	陶磁器片転用品		2.6	2.5	1.0		1mm未満の砂粒	良好	胎土:赤褐色 外:暗褐色	縁を加工
21	37	2区				包含層	陶磁器片転用品		2.5	2.1	0.6		精緻	良好	外:灰白色 内:暗オリーブ色	縁を加工
21	38	2区				清和時	陶磁器片転用品		2.8	3.0	0.8			良好	胎土:赤褐色 釉:黒褐色	縁を加工
21	39	2区	a2			III層	土人形	土人形?	2.3+	2.0	1.1	肩~胴部:1/2	精緻	良好	にぶい黄褐色	下端に穿孔有
21	40	2区				清和時	芥子面	虚無僧	2.4+	2.1+	1.0+	1/2	精緻	良好	黄褐色	木葉炭産か
21	41	2区				清和時	芥子面	鑑武者?	1.8	1.7	0.7	完形	精緻	良好	褐色	木葉炭産か。
21	42	2区	c2			III層	芥子面	異邦人?	2.9	2.4	1.2	大半	精緻	良好	淡褐色	木葉炭産か。粘土の継ぎ目残る
21	43	2区	c1			III層	芥子面	役者?	2.4	2.3+	0.9	大半	1mm未満の砂粒	良好	にぶい褐色	頭部は黒く着色。木葉炭産か。
21	44	2区	c2			III層	芥子面	翁	3.2	2.0	1.0	完形	精緻	良好	淡黄色	胎土は木葉炭産。
21	45	2区	a2			III層	芥子面	三方	1.7+	1.3+	0.8+	完形	精緻	良好	にぶい褐色	木葉炭産か
21	46	2区				II~III層	芥子面	柑か釣瓶?	1.5	1.5	0.5	完形?	1mm未満の砂粒	良好	にぶい褐色	木葉炭産か。
21	47	2区	a1			III~IV層	泥面子	菊水?	1.6	2.1	0.6	完形?	精緻	良好	にぶい褐色	木葉炭産か。
21	48	2区				II~III層	泥面子	菊水?	1.5	2.0	0.6	完形?	精緻	良好	にぶい褐色	木葉炭産か。
21	49	2区	a2			V層	粘土塊?		2.0	2.0	2.1		精緻	良	にぶい黄褐色	径2mm程度の穿孔か軸の痕跡有
21	50	2区				II~III層	面蓋	毘沙門天?	4.8	4.8	3.0	完形	精緻	良好	浅黄褐色	内面及び肩部に施釉。型押しで成形

報告書抄録

ふりがな	くわみずいせき
書名	神水遺跡3
副書名	熊本県立熊本商業高等学校校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第258集
編著者名	中村幸弘
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609 熊本県熊本市水前寺 6丁目 18-1 TEL 096-333-2707
発行年月日	2011年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くわみずいせき 神水遺跡	くまもとけん 熊本県 くまもとし 熊本市 くわみず 神水	43201	355	32° 47' 12"	130° 44' 22"	20081015 ～ 20090130	787.4	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神水遺跡	包蔵地	古代～ 古代～近世 近世～近代	道路跡 1 土坑 3 小穴 3 溝状遺構 1	土師器 須恵器 瓦 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 金属器 瓦 土製品	

要約	<p>神水遺跡は、阿蘇外輪山麓から熊本平野に向かって西になだらかに傾斜する肥後台地の一つ、託麻原台地の南端に位置している。これまでの発掘調査で弥生時代及び古代を主体とする遺跡であることが明らかになっている。今回の発掘調査は、熊本県立熊本商業高等学校校舎改築事業に伴い実施されたもので、後世の開発等による削平にもかかわらず古代の道路跡をはじめとして土坑、小穴、溝状遺構を検出し、弥生時代から近代までの幅広い出土遺物を確認した。これらの成果は、古代における当該地域の交通網の実態、及び近世から近代にかけての土地利用の変遷を考えるうえで重要といえる。また、これまで土製品、とりわけ土製玩具についてあまり着目されてこなかった。今回出土した泥面子の製作元について知見を得られたことは、不明な点が多かった土製玩具の実態を知るうえで重要な成果といえる。</p>
----	---

写 真 图 版



図版 1 1区全景（北東から）



図版 2 1区土層断面（西から）



図版 3 1号溝状遺構（西から）



図版4 1号溝状遺構埋土断面1 (東から)



図版5 1号溝状遺構埋土断面2 (東から)



図版6 2号土坑 (南から)



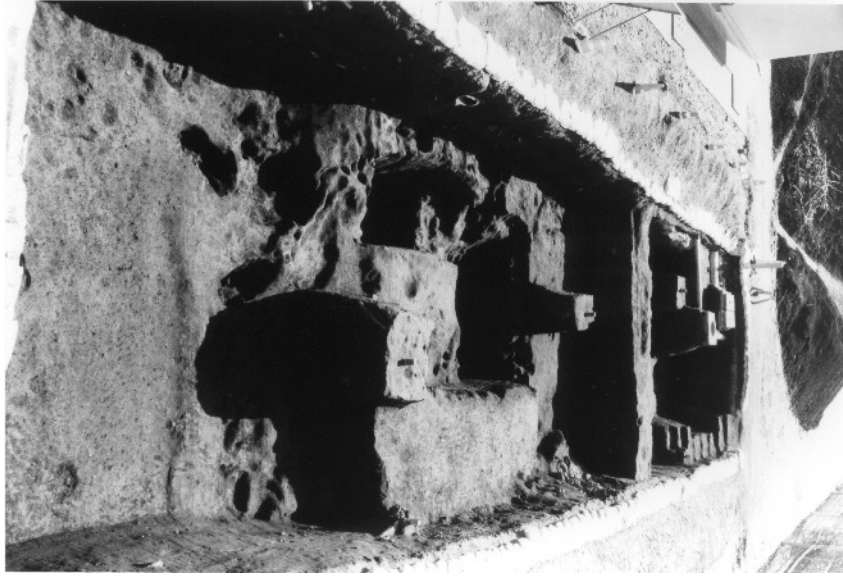
図版7 3号土坑及び4号土坑（東から）



図版8 1号小穴（南から）



図版9 2号小穴及び3号小穴（南から）



図版 10 2区全景（北から）



図版 11 2区土層断面（西から）



図版 12 2号道路跡（北から）



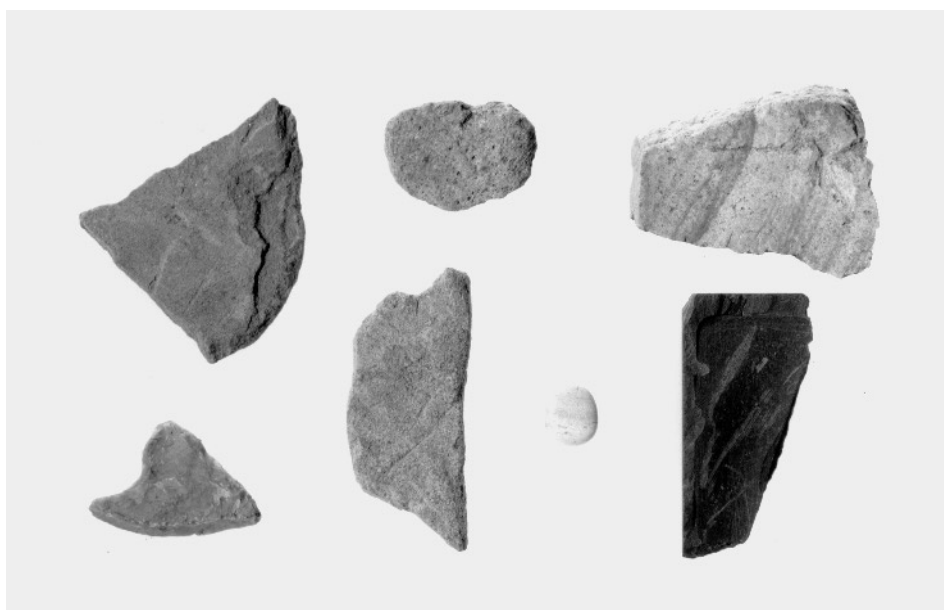
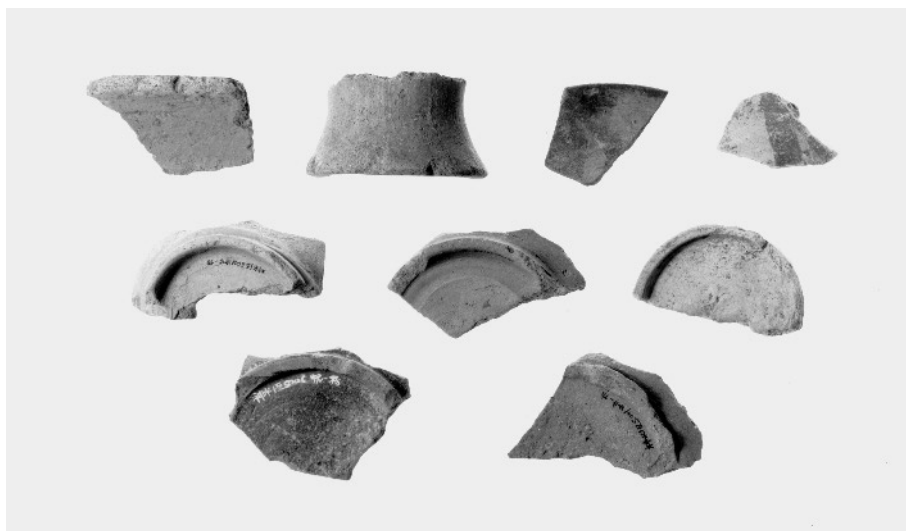
図版 13 2号道路跡硬化面（南から）



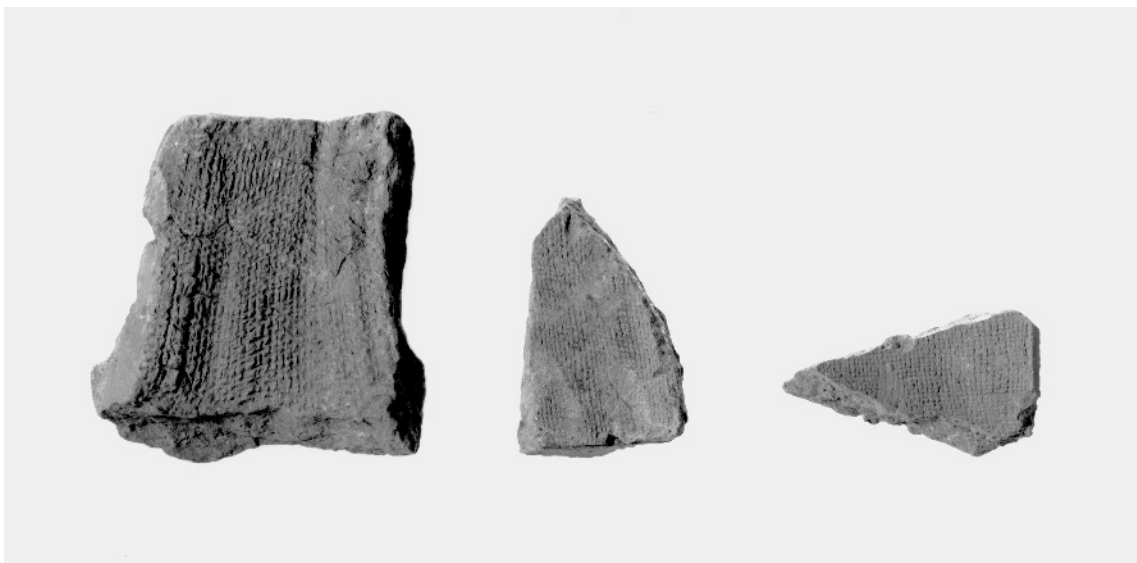
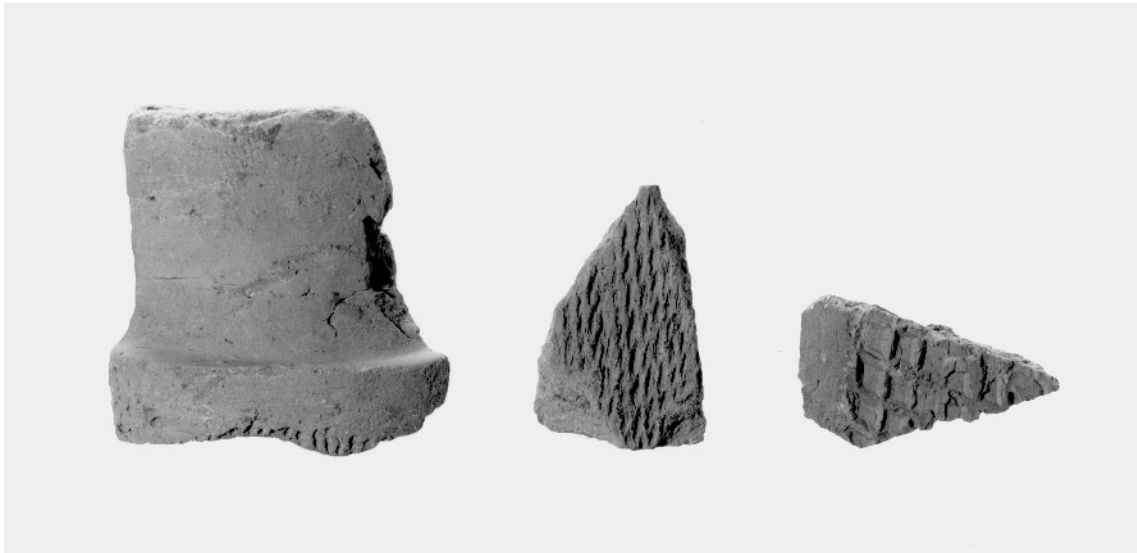
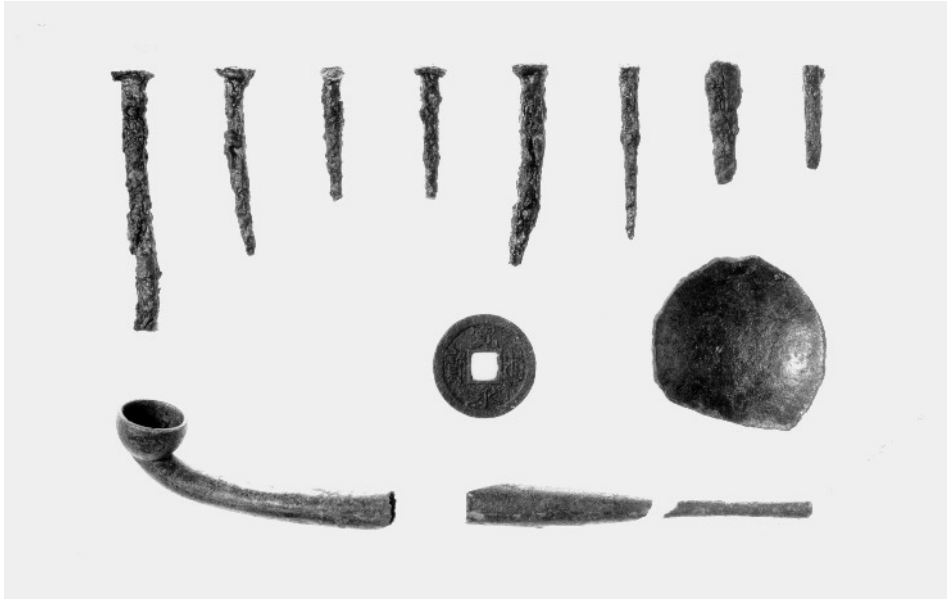
図版 14 2号道路跡礫集中部（北から）



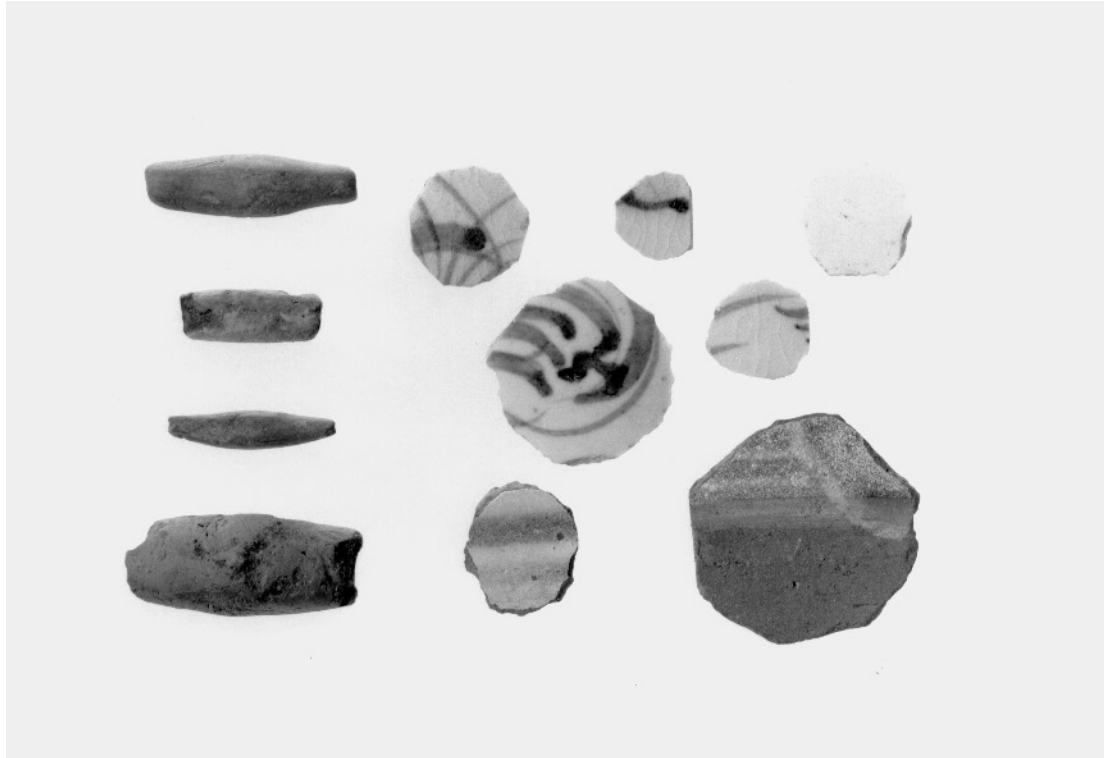
図版 15 2号道路跡礫集中部（礫除去後 北から）



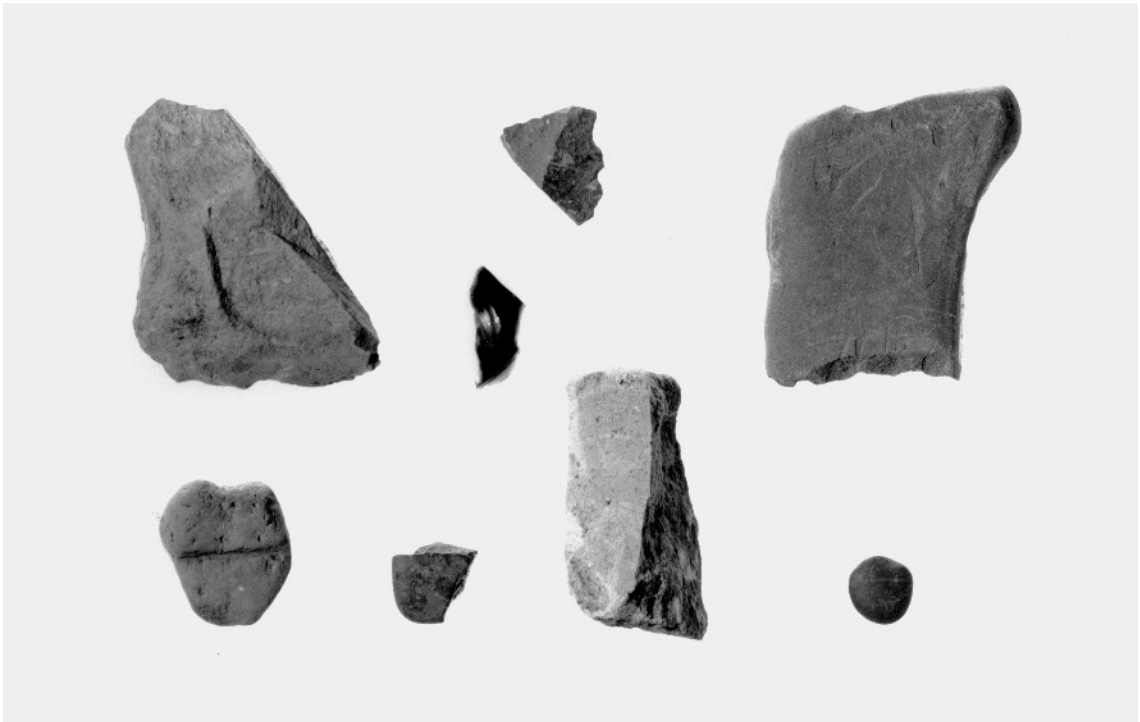
图版 16 1区出土遺物（土器等、石器）



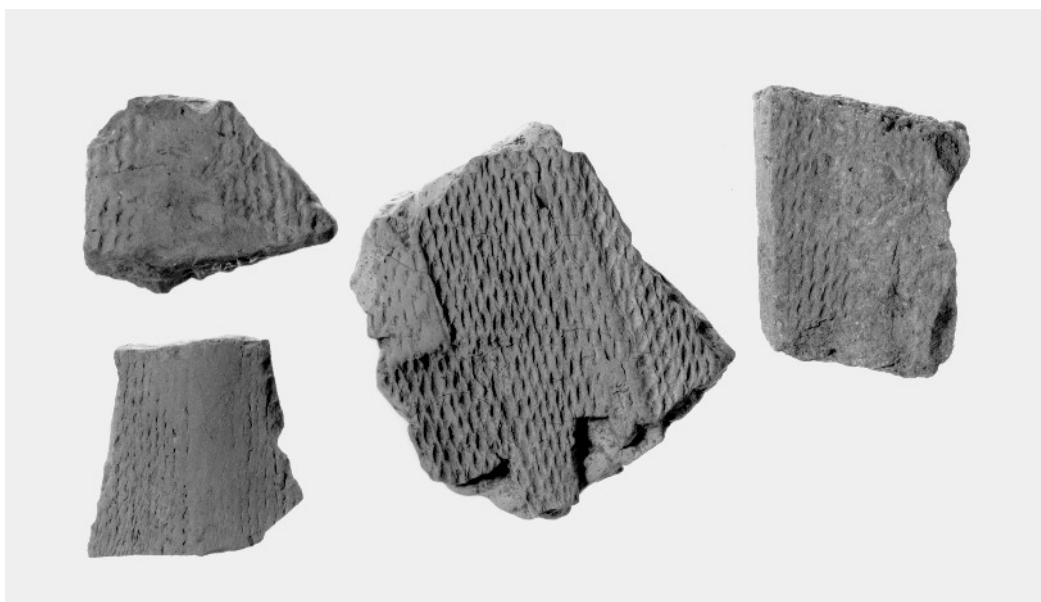
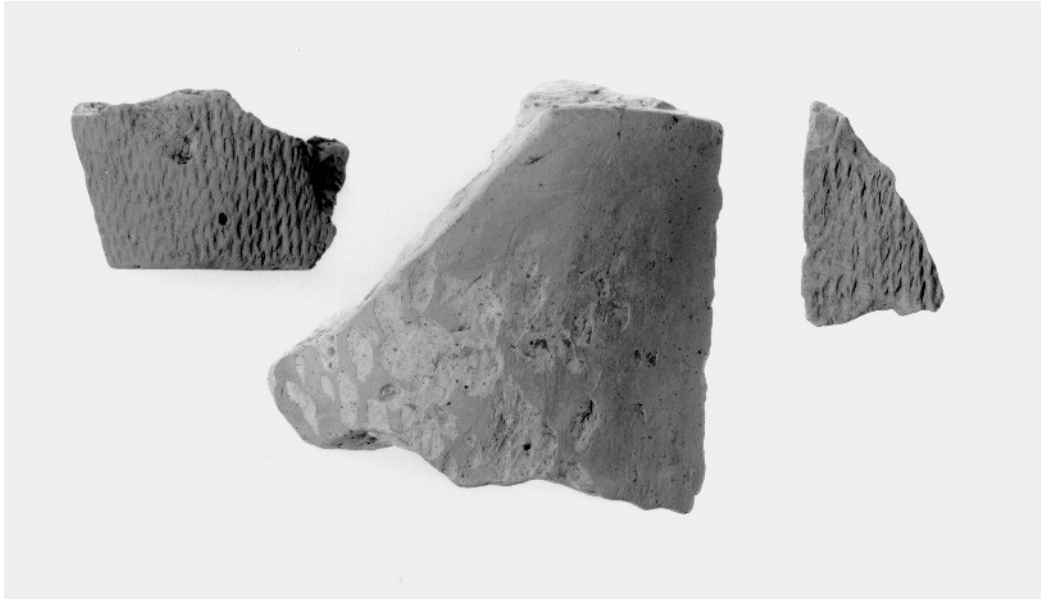
图版 17 1区出土遺物（金属器、瓦）



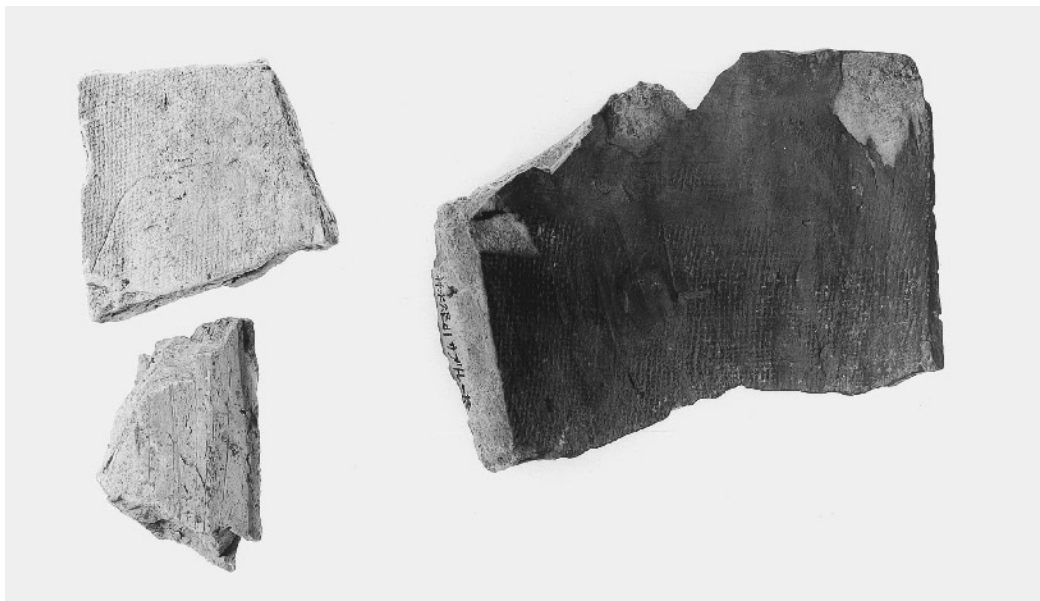
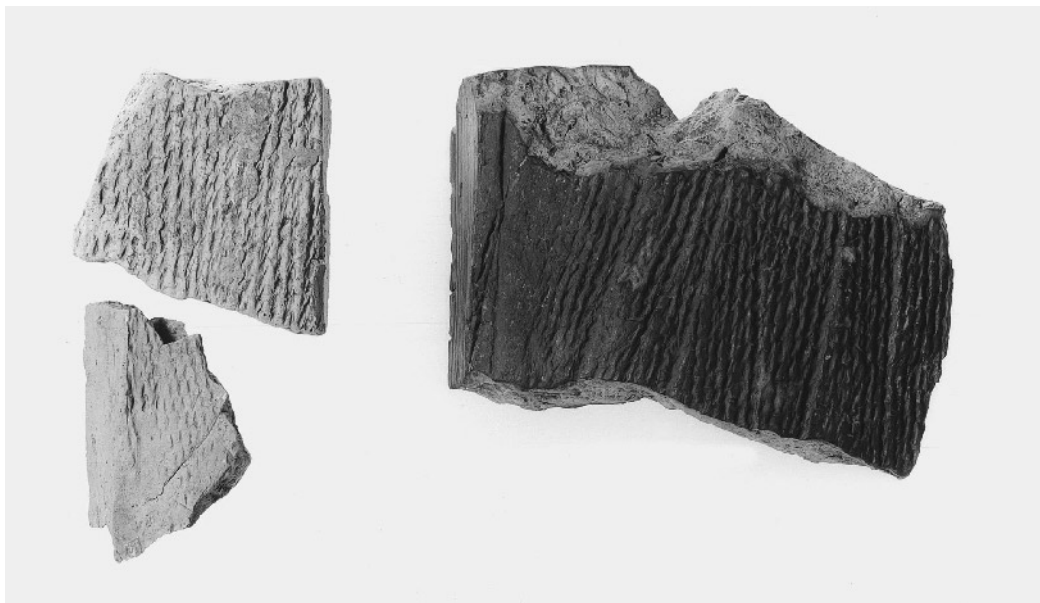
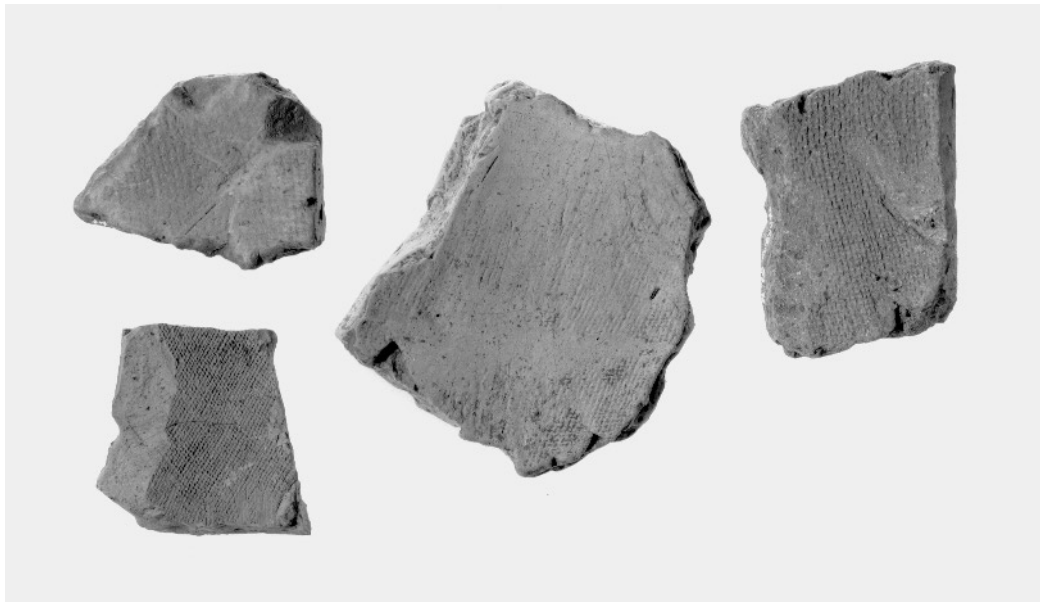
图版 18 1区出土遺物（土製品）



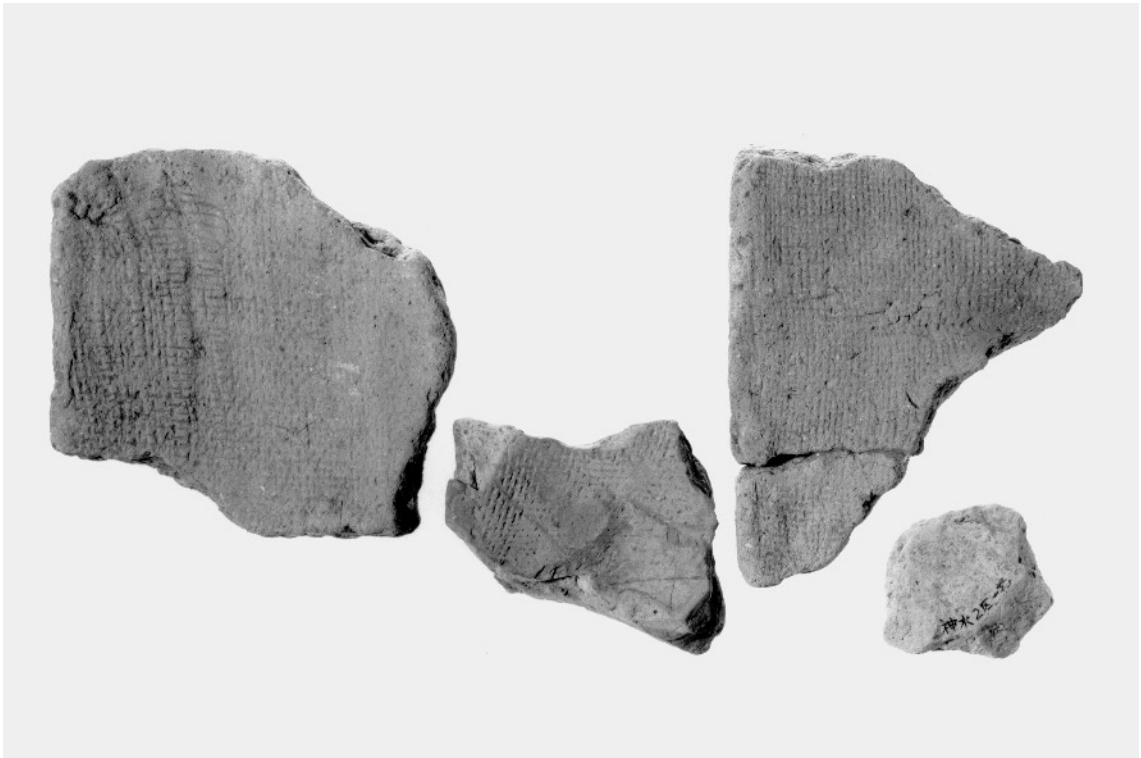
图版 19 2区出土遺物（土器等、石器、金属器）



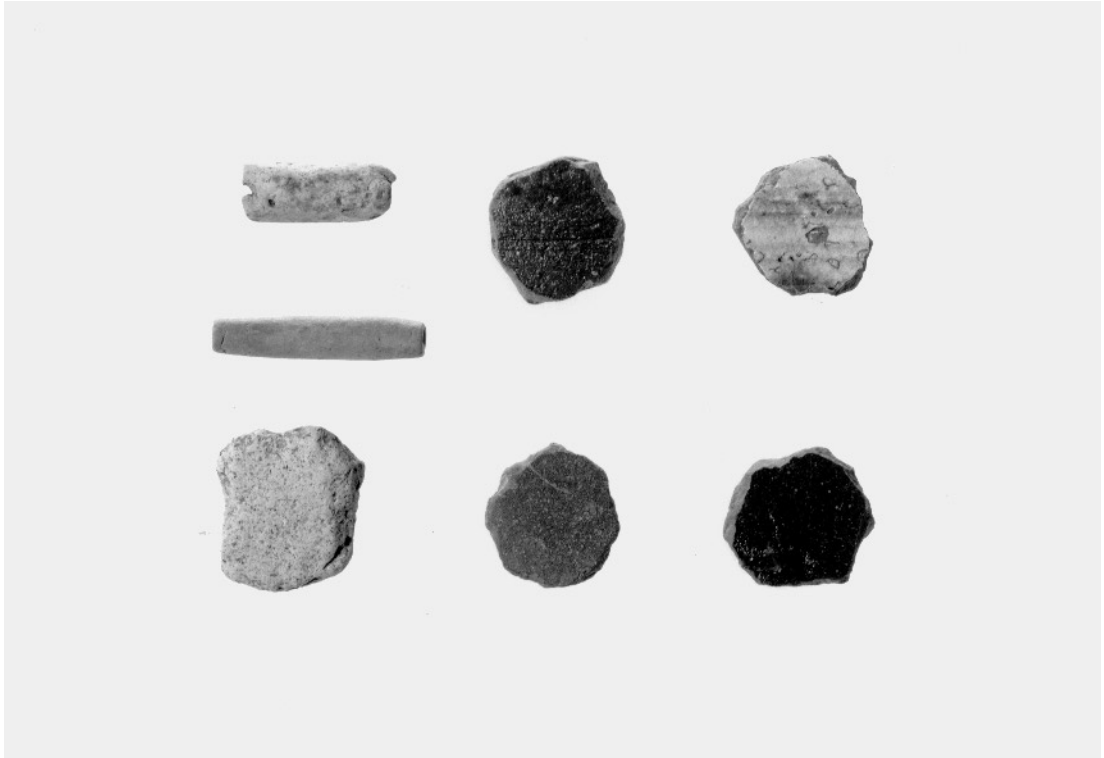
图版 20 2区出土遺物 (瓦 1)



图版 21 2区出土遺物 (瓦 2)



图版 22 2区出土遺物 (瓦3)



图版 23 2区出土遺物（土製品）



图版 24 2区2号道路迹出土遗物（土器等、瓦）

印刷仕様

規格 A 4 判
頁数 72 頁
組版 写真写植
印刷 オフセット印刷
製版 カラー写真 スクリーン線数 200 線 4 色刷り
モノクロ写真 スクリーン線数 200 線 1 色刷り
用紙 表紙 アートポスト紙 200 k
見返し 上質紙 110 k
図版 マットアート紙 110 k
本文 上質紙 90 k
製本 糸綴じ

熊本県文化財調査報告第 258 集

神水遺跡 3

熊本県立熊本商業高等学校校舎改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成 23 年 3 月 31 日
発行 熊本県教育委員会
〒862-8609 熊本市水前寺 6 丁目 18 番 1 号
印刷 株式会社 星光社
〒860-0029 熊本市米屋町 2 - 4

22 教委 教文

② 001

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 258 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 神水遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日